平成８年度農村総合整備まほろばの里事業上市地区に伴う

富山県上市町

砂林開北遺跡発掘調査概報

1998年３月

上市町教育委員会

平成８年度農村総合整備まほろばの里事業上市地区に伴う

富山県上市町

砂林開北遺跡発掘調査概報

1998年３月

上市町教育委員会

序

上市町砂林開北遺跡は、昭和63年度に上市町教育委員会が行った、町内詳細分布調査で発見された遺跡です。平成７年度にこの地区の農業環境整備の一環として農道の改良事業が計画され、遺跡の一部分が計画地に係ることになりました。上市町教育委員会では、それを受け平成９年度に事前の発掘調査を実施いたしました。

遺跡の範囲は、約30,000㎡でしたが、調査は、農道改良部分に限定して実施したため遺跡の大部分は保存することができました。

発掘調査では弥生時代最終末から古墳時代初頭の遺構・遺物をはじめ縄文時代の住居跡も検出され、長い期間にわたって人々の生活がこの地に営まれていたことを示してくれました。特に弥生時代最終末から古墳時代初頭では、千を越える遺構、とそれに伴う数多くの遺物が検出され、この地にいままで発見されたことのない大集落があることが判明しました。また当時栽培されていたと考えられる炭化した米・粟も出土し穀物による祭祀が行われていたことも示してくれました。

調査は、平成９年の10月から12月に実施しましたが、この間に掘り出された資料が上市町及び富山県の歴史を物語るよすがとなれば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたり多大なご協力をいただきました富山県農地林務部・上市町農林課、地元砂林開地区・南加積地区のみなさまに心より感謝申し上げます。

平成10年３月

上市町教育委員会

例　言

1　本書は富山県上市町砂林(すなばやし)開地(ひらち)内に所在する砂林開北(すなばやしひらきた)遺跡(いせき)の発掘調査報告である。

2　調査は平成９年10月１日から同年12月26日までの延べ62日間で実施した。

3　遺跡は約30,000㎡の規模を持つが、調査面積は2,000㎡で遺跡全体の７％程度である。

4　調査は上市町教育委員会が、上市町農林課の委託を受け実施したが、農業関連事業であるところから農家負担分については、上市町教育委員会が国庫補助金・県費補助金を受け負担し、実施した。

5　調査事務局は、上市町教育委員会にあり、調査期間中、文化庁記念物課、富山県教育委員会（文化課・県埋蔵文化財センター）の指導を受けた。事務及び調査担当は、生涯学習課文化振興係係長高慶孝・同嘱託芳賀万里子が、担当し、生涯学習課長山口哲夫が総括した。

6　遺物の整理、本書の編集・執筆は、基本的には調査担当が行ったが、出土遺物中、植物遺体に関しては富山県立山博物館学芸課主任吉井亮一氏に同定及び検討を加えていただき調査担当と共著の形で執筆願った。また氏には写真撮影についてもご協力をいただいた。

7　調査期間中及び本書の作成にあたり、下記の方々から有意義な指導・助言並びにご協力を頂いた。記して深甚なる謝意としたい。

静岡大学農学部助教授 佐藤洋一郎　富山大学人文学部教授 宇野隆夫　富山市教育委員会生涯学習課主幹 藤田富士夫　富山県埋蔵文化財センター主任 斎藤　隆、久々忠義、橋本正春　魚津市教育委員会社会教育課主任 麻柄一志、立山町教育委員会社会教育課主任 三鍋秀典、同嘱託 新本真之・中島義人　石川県立埋蔵文化財センター 安英樹

8　調査参加者はつぎのとおりである。

山崎雅恵（以上富山大学大学院）金成淳一、後藤晋、小松博幸、須田雅昭、滝川邦彦、戸簾暢宏、中島和哉、中野秀昭、早川さやか、磯村愛子、遠野いずみ、真井田宏彰、広瀬直樹、渡辺樹（以上富山大学学生）荒木智恵子、伊東藤一、伊藤萩子、岩城秀子、碓井小一郎、大沢邦子、大沢富子、小川晃、奥井京子、金子道子、金子みつゑ、川上富美子、黒田忠美子、黒田キク、黒田輝久、桑名マツエ、酒井栄子、酒井文子、塩田和子、城木馨子、芽内みき子、清田秀子、高城英子、高城富美子、高城準子、武田珠美、竹林昭夫、立花ミツエ、田中フミ子、谷口京子、中村スミ子、中川セツ、西川文一、西野ミツイ、長谷朝子、早崎秋子、樋口正一、古井みさ子、松井早苗、三輪光子、村上重則、森田礼子、安村ミツ子、若木啓子（以上作業員）

山崎雅恵（整理作業員富山大学大学院）後藤晋、小松博幸、須田雅昭、滝川邦彦、戸簾暢宏、中島和哉、中野秀昭、砂田晋司、瓜生甘奈子、川端良招（整理作業員富山大学学生）飯野由美恵、奥井京子、川上富美子、黒田恵美子、酒井栄子、酒井文子、塩田和子、芽内みき子、清田秀子、武田珠美、谷口京子、早崎秋子、古井みさ子、松井早苗、西野ミツイ（整理作業員）

目　　次

序　文
例　言
Ⅰ　遺跡の環境 …… 1
　第1図　地形と周辺の遺跡 …… 2
Ⅱ　調査に至る経過 …… 3
Ⅲ　調査の経過と層序 …… 3
　第2図　地形と区割図 …… 4
Ⅳ　調査結果 …… 5
　1．遺　構 …… 5
　2．遺　物 …… 7
Ⅴ　調査成果の整理 …… 11
Ⅵ　まとめ …… 15
　引用・参考文献

第3図　遺構実測図
第4図　遺構実測図
第5図　遺構実測図
第6図　遺構実測図
第7図　遺構実測図
第8図　遺構実測図
第9図　遺構実測図
第10図　遺構実測図

図　版
図版1　砂林周北遺跡周辺航空写真
図版2　遺物実測図
図版3　遺物実測図
図版4　遺物実測図
図版5　遺物実測図
図版6　遺物実測図
図版7　遺物実測図
図版8　遺物実測図
図版9　遺物実測図
図版10　遺物実測図
図版11　遺物実測図
図版12　遺構写真
図版13　遺構写真
図版14　遺構写真
図版15　遺構写真
図版16　遺構写真
図版17　遺構写真
図版18　遺構写真
図版19　遺構写真
図版20　遺構写真
図版21　遺物写真
図版22　遺物写真
図版23　遺物写真
図版24　遺物写真
図版25　遺物写真
図版26　遺物写真
図版27　遺物写真
図版28　遺物写真
図版29　遺物写真
図版30　遺物写真
図版31　遺物写真
図版32　遺物写真
図版33　遺物写真
図版34　遺物写真
図版35　遺物写真
図版36　遺物写真
図版37　遺物写真
図版38　遺物写真

Ⅰ　遺跡の環境

砂林開北遺跡は、富山県中新川郡上市町砂林開地内に所在する（第１図・第２図）。上市町は、富山県の中央県都である富山市の東に位置し、北を滑川市、南を立山町に接する。

町の東部は、鍋岳（標高2998ｍ）をはじめとする北アルプス立山連峰がそびえる。町の西部は、上市川・白岩川・郷川により形作られた複合扇状地で、緑の田園地帯を形成している。もっとも標高の高い鍋岳山頂ともっとも低い平野部での比高差は、直線距離約20㎞で2,980ｍであり、かなり急峻な地形といえる。しかしながら90％以上の遺跡が集中する平野部は、標高50ｍ以下の部分であり、現在も住民の大多数がここに集住する。

遺跡は、町の中心街の北東隅にあり、滑川市と北西で接する位置にある。遺跡は、町の北東を東から北西にむっかって流れる郷川の左岸標高約35ｍから40ｍの台地に占地する。

この台地は平野部に向かって突き出た形で、南東から北西にのびている。標高はさほど高くはないが、南西と北東側の谷との比高差が約20ｍ程度あり、平野側からみるとひときは高く独立して見える。

台地は、北東にむっかって三角形に突出しており台地の北西に富山湾を一望できる。また翻って南東側には鍋岳を中心とした立山連峰を一望できる。ここに集落を形成した人々も、台地からの眺望にも優れ、また平野部からの視認性にも優れるこの立地を生かしたものと考える。

この台地の東側は郷川によって形作られた谷地形で谷から平野へ向かう出口に当たる。対岸は、50ｍの丘陵地でそこから東に向かって山間となる。この丘陵地にも同時代の遺跡の存在する可能性が高いものと考える。

遺跡地内は少なくとも明治以降から農業用地として利用されてきており、一部に改変が認められるものの基本的には旧地形を残しているものと考えられる。

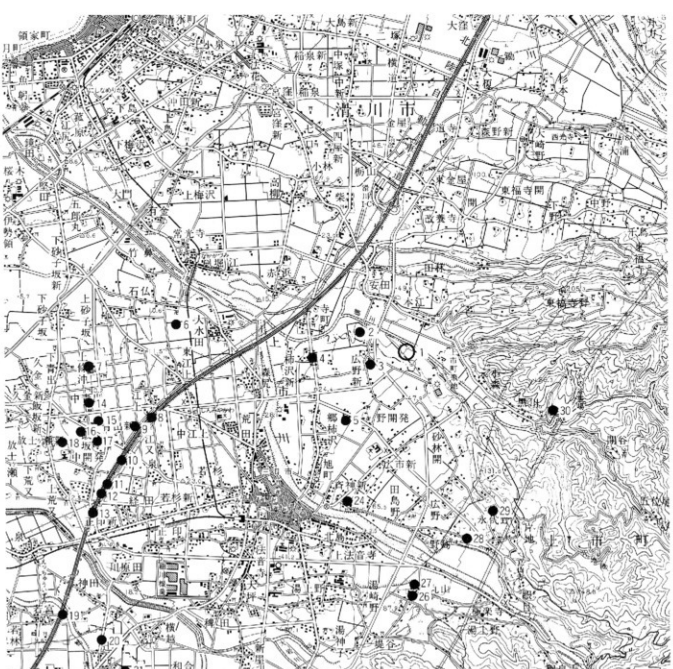
遺跡は、昭和63年度に実施した町内遺跡詳細分布調査の際に発見されたが、縄文時代・弥生時代最終末の遺跡として考えられてきた。しかしながら今回の調査で古墳時代にもまたがる遺跡として見直すべき出土遺物が出土しているところからその立地と相まって付近に古墳あるいはそれに類する遺構が存在した可能性が高い。

周辺の遺跡に目を転ずると本遺跡北西に滑川市魚躬遺跡（弥生）、西に江上Ａ遺跡、江上Ｂ遺跡、中小泉遺跡、（弥生）また、本遺跡の西側約600ｍに県指定史跡、古墳時代の本江遺跡が占地している。この遺跡と谷を挟んでほぼ同一の標高の河岸段丘上に立地しており、台形状のプランを持つ竪穴式住居跡が確認されている。時期的にみても本遺跡と何らかの関係があったものと推察される。

このほか町内には、広野新南・柿沢新・郷柿沢・大永出・下青出・飯坂・下経田・正印新・中青出・中青出南・中開発北・飯坂北・相ノ木北遺跡が平野部に点在しており、さらに西の立山町には、若宮Ｂ・辻・辻宮下・高原諏訪の各遺跡所在し、中新川郡でもっとも規模の大きい雌子塚古墳が存在している。これらの遺跡と本遺跡との関係が時代的にどう関連するか興味深いところである。

また、平野部からやや高い段丘や、台地、山間部には、斉神新古墳群（古墳末）、柿沢古墳群（古墳時代前期）などの古墳群がある。これらの古墳群のバックグラウンドについては定かではない。また富山県内全体においても古墳時代初頭、あるいは弥生時代最終末の遺跡の調査は進んでおらず、遺跡相互の関係、古墳時代においては古墳と集落の関わりが明確とはいえない状況である。ちなみに弥生時代末から古墳時代前期における集落のあり方はこれまであまり多くの住居跡が集中することはなく、散居していたものと考える論考が多いようにみうけられる。

しかしながら後述する本遺跡の立地やあり方は、これらの論考に修正を加えるべき点が数多くあることを示唆しているものと考える。本地域における弥生時代遺跡・古墳時代遺跡の相互の関連、時代感を明確にすることで県内の弥生時代から古墳時代の様相をある程度復元できるものと考える。



第１図　地形と周辺の遺跡 (1/50,000)

1．砂林開北遺跡，2．本江広野新遺跡，3．広野新南遺跡，4．柿沢新遺跡，5．郷柿沢遺跡，6．大永田遺跡，7．下青出遺跡，8．江上Ｂ遺跡，9．江上Ａ遺跡，10．飯坂遺跡，11．中小泉遺跡，12．下経田遺跡，13．正印新遺跡，14．中青出遺跡，15．中青出南遺跡，16．中開発北遺跡，17．飯坂北遺跡，18．相ノ木北遺跡，19．若宮Ｂ遺跡，20．辻遺跡，21．辻宮下遺跡，22．高原諏訪遺跡，23．下女川遺跡，24．斉神新古墳群，25．柿沢古墳群，26．丸山Ｅ遺跡，27．丸山Ａ遺跡，28．永代遺跡，29．永代野遺跡，30．黒川古墳

Ⅱ　調査に至る経過

上市町砂林国地内には、平成８年度から、農村総合整備事業まほろばの里事業の一環として農道改良事業が計画され、平成10年度に事業が実施されることになった。しかしながら同地内には、砂林開北遺跡の存在が知られており、地元砂林地区・上市町農林課、上市町教育委員会・富山県教育委員会の４者により、遺跡の保護と工事計画の調整を図るための事前協議が催された。

協議では、まず計画地内の試掘調査を実施することになり、平成８年12月に上市町教育委員会の手によって実施された。その結果、道路改良される路線中、台地平坦部全面に遺跡が広がっており約30,000㎡の範囲にまたがることが確認された。この結果から農道の迂回は不可能で、路線に当たる約2,000㎡（幅員５ｍ、全長400ｍ）全線にわたる発掘調査が必要となった。

これにより、発掘調査は、平成９年の耕作が終了する10月から行い、農道改良工事は、平成10年10月から実施する事で４者が合意した。

調査費用は、上市町農林課が、上市町教育委員会に委託して実施する事としたが、農業関連事業であるところから、農家負担分については、上市町教育委員会が、国庫補助金・県費補助金をえて負担することとなった。

Ⅲ　調査の経過と層序

第１次調査（平成８年度試掘調査）

平成８年12月21日から同年12月23日までの延べ２日間で実施した。調査は、農道改良事業予定地内2,000㎡を対象に遺構・遺物の確認調査を実施した。

その結果、一部戦後のほ場整備のため掘削を受けた部分があるものの、土壙・穴などが確認され遺物も整理箱１箱程度で、非常によい残存状況を示した。

また、同時に調査区と平行に走る素堀の用水を中心に分布調査を実施した。遺物は少量であったが、用水内に土壙・穴などを多数確認、遺跡範囲がほぼ台地全面の３haに及ぶことが確認された。

なお、調査は、上市町が試掘として対処し、県費補助金を受けて実施した。

第２次調査（平成９年度本調査）

平成９年10月１日から同年12月26日までの延べ62日間で実施した。遺跡範囲３haの内農道改良部分2,000㎡の記録保存調査を実施した。

その結果、弥生時代最終末から古墳時代初頭を中心とした住居跡７棟、土壙95、穴1,003、溝12を検出したほか縄文時代（中期）の住居跡２棟、奈良・平安時代の住居跡１棟を検出した。遺物は、遺構に伴うものがほとんどで、遺物整理箱150箱分を出土した。

なお、調査は上市町が上市町農林課の委託を受けて実施したが、地元負担金については上市町教育委員会が、国庫補助金・県費補助金を得て実施した。

層　序

層序は、第１層耕作土層（10～30cm）・第２層灰褐色土層（約20cm）・第３層黒褐色土層（10～20cm）第４層黄灰褐色土層・第５層黄色土層となっている。このうち２・３層が遺物包含層で４・５（地山）の直上で遺構を確認した。

第２図　地形と区割図 (1/2,500)
(座標は，国土座標に平行である。)

Ⅳ 調査結果

1．遺　構（第３～10図、図版12～20）

調査により検出した遺構は、縄文時代、弥生時代最終末ないし古墳時代初頭、奈良・平安時代に属するものである。遺構は調査区全体で検出されるが、一部戦後のほ場整備等で攪乱を受けた部分もある。

検出した遺構は、縄文時代中期の住居跡２棟、土壙１カ所、弥生時代最終末ないし古墳時代初頭の住居跡７棟、土壙95カ所、溝２カ所、穴1,003カ所、奈良・平安時代の住居跡１カ所を検出した。検出面は、いずれも４・５層でほぼ地山直上であった。以下、弥生時代最終末ないし古墳時代初頭を中心に時代ごと遺構ごとに記載する。

弥生時代最終末・古墳時代初頭

住居跡　住居は、調査区全体で７棟検出したが、いずれも一部に攪乱をうけており、また調査が道路敷きに限定されたため一棟全体を確認できたものはない。

第１号住居跡（第３・８－１図、図版14－４）調査区北西端Ｘ３～４・Ｙ０～１付近で、台地の北端に位置する。調査区北辺で検出され全体の約１／４程度が検出された。この住居跡は戦後のほ場整備で掘屑がかなり削平を受けており現在残るのは５㎝前後とわずかである。平面形は、残存部から隅丸方形のプランが推定され、１辺は約5.5ｍである。柱穴は２カ所のみ検出し全体像は定かではない。住居内で土師質の土器を発見し弥生時代最終末の住居と考えた。

第２号住居跡（第３図、図版14－６）１号住居の南西10ｍに位置する後世の畑作のためそのほとんどが失われており詳細は定かではない。攪乱壁に掘屑がわずかに残るのみである。

第４号住居（第４・８－２図、図版16－１～３）調査区のほぼ中央Ｘ20～25・Ｙ75～76に位置する。標高約38ｍの台地の中央部分にあり、１辺が7.5ｍのかなり大きな規模の隅丸方形のプランを呈する。残念ながら全体の１／３程度を残すのみで水田耕作のため削平を受けている。堀屑は約30㎝と深くしっかりした作りの住居という印象を与える。残存部に残る柱穴は、15あるが、主柱は判然としない。住居西辺中央に１辺50㎝のほぼ正方形の土壙があり周辺の堀込みに土器が集中する。深さは、55㎝と深く他の穴とその用途の違いが明確である。南辺には高坏の頸部より上が、うつ伏せの状態で出土した。住居北西隅の外側に径約1.2ｍ深さ95㎝の大きな土壙が伴う。出土遺物から古墳時代初頭の住居跡と考えた。

第５号住居跡（第５・10－１図、図版16－４・５）Ｘ31～34・Ｙ98～101に位置する。住居跡の西側に深さ20㎝ほどの堀屑が残って居るが他は削平を受けており残っていない。土器が集中して検出されたこと、床面が確認できたことから、１辺が約５ｍの隅丸方形の住居跡と考えた。全体の１／２を検出したが前述のように残りはよくない。柱穴は、５箇所を確認したが、調査が限定的であるため全体は判然としない。住居のほぼ中央に１辺1.3ｍ・深さ５㎝程度の方形の堀込みがある。やや被熱した跡が見受けられる。住居の軸方向は、北東を向く。遺物は、床面のほぼ全体で出土しており残りも良好である。遺物から、この住居は弥生時代最終末から古墳時代初頭のものと考えた。

第６号住居跡（第５・９－１図、図版17－３）Ｘ36～34・Ｙ199～123付近に位置する。住居は東側・西側に残る堀屑及び溝によって住居跡と確認できる。南西側は農業用水路と水田耕作のため失われている。住居は、東西両サイドの溝間の距離から１辺が約７ｍの方形の住居と推定した。溝は、両サイドとも、幅約20㎝深さは床面から約５㎝ではぼ同サイズでそれぞれ２ｍ分検出した。柱穴は、Ｐ１からＰ３を検出したが、詳細は判然としない。住居西側中央に1.5ｍ×1.3ｍの浅い堀込みがあり焦土が検出された。出土遺物は土器・石器などであるが、土器には赤彩されたもの、石器には石枠と思われるものが含まれており、前述の焦土と考えあわせると他の建物と違う意味合いの住居である可能性が高い。出土遺物から古墳時代初頭のものと考えた。

第7号住居跡（第5・9－2図、図版17－4・5）X38～39・Y134～136付近に位置する。水田耕作により削平を受けており全体の1/2を残すのみである。北西に掘り肩が残っており地山から約20cm掘こんで床面がもうけられている。平面形は4×4mの方形のプランを呈する。掘肩の直下には、幅20cm、深さ約10cm、長さ4mの周溝を残す。住居中央西に径約50cmの焦土が残っており、地焼炉と考える。住居跡北隅の外側に径約1mの土壙を伴う。遺物は、縄文上器が一部混ざり込むが、住居跡に伴うものは、弥生時代最終末から古墳時代初頭のものである。

SK1201（第5・7－1図、図版19－5・6）X44～45・Y161～162付近に位置する。平面形から土壙として取り上げたが、周辺に柱穴が確認され住居跡として取り扱いたい。平面形は円形で径2.5m、深さは、地山から約70cm掘込まれている。住居跡縁辺に12カ所の柱穴と考えられる穴がある。深さ20～30cm径20cmのものである。床面には柱穴はないが、地山から60cmで黄褐色の堅い層が確認され、張り床されていた可能性を持つ。埋土中には137個体に及ぶ大量の土器片が出土しており後に土器の放置場所となったものと思われる。上器は、弥生時代最終末から古墳時代初頭のものである。

土壙　土壙は96カ所を検出した。おおむね径1m前後の円形のものであるが、方形又は長方形のものが、4カ所ありいずれも遺物を伴う。このほか遺物を伴う円形のもの2カ所を含め計6カ所の土壙についてその詳細について述べる。

SK64（第3・6－1図、図版15－1）X17・Y17付近に位置する。長さ約2m、幅85cmの長方形を呈し、深さ25cmのものである。出土遺物は、甕・高坏・壺の破片であるが、甕はほぼ完形で出土した。埋土は黒褐色で甕の中もこの土で充填されている。出土遺物から弥生時代最終末のものと考えた。

SK177（第3・6－2図、図版15－5・6）X19・Y29付近に位置する。1.2×1.3mのほぼ方形に近い形状の土壙で、深さは地山から約40cmである。出土遺物は甕・高坏・壺でかなり良好な出土状態であった。遺物から弥生時代最終末から古墳時代初頭のものと考える。

SK592（第5・6－3図、図版16－6・7）X34・Y103付近に位置し、5号住居跡の南東7mで検出した。1.4×1.3mのほぼ方形に近い形状の土壙で、深さは地山から約50cmである。出土遺物は、甕・高坏・器台の破片であるが、良好な残存状況で出土した。遺物から弥生時代最終末から古墳時代初頭のものと考える。

SK658（第5・6－4図、図版17－2）X35・Y114付近に位置する。1×1.3mのやや長方形の土壙で、深さは地山から約30cmである。出土遺物は、壺・甕・高坏・器台で良好な状態で出土した。弥生時代最終末から古墳時代初頭のものと考える。

SK914（第5・6－5図、図版19－1・2）X45・Y154付近に位置する。径約95cmの円形の土壙で、深さは、40cmのものである。出土遺物は、壺・長頸壺・甕・高坏で特に長頸壺からは、炭化したイネ・アワないしヒエが納められていた。遺物から弥生時代最終末から古墳時代初頭のものと考える。

SK1032（第5・10－4図）X46・Y160に位置する。9号住居跡東に切合って検出された。規模は、径1.2m深さ約40cmの円形の土壙である。出土遺物は、甕の上胴半を出土した。

以上であるが、方形の土壙SK177・592・658は1辺が1～1.4mのもので形がよく似通っている。また、遺物を伴う土壙は、数こそ違え、壺・甕・高坏ないしは器台がセットとなって出土しており、後述する遺物の項でもふれるが、弥生的な特徴を持つものと古墳的な特徴を持つ遺物が共伴して出土している。これらの土壙がなにを目的に穿たれたのかが、大きなテーマになると考える。

奈良・平安期

奈良・平安期の遺物は、調査区北側で僅かに拾える程度である。しかしながら、なんらかの人の営みがあったことは確実で、住居跡が1棟検出された。

第３号住居（第３・７－２図、図版15－４）Ｘ20・Ｙ35付近に位置する。台形のプランを呈し軸は磁北に平行である。規模は南辺で3.3ｍ北辺で推定２ｍ軸方向で約４ｍの竪穴住居である。堀込みはもっとも残りのよい南辺で地山から約30㎝である。柱穴は４カ所検出したが、おそらく５本柱の住居と推察される。北側に雛跡と考えられる堀込みがあり焦土が観察された。遺物は、壺・甕のほか須恵器の杯・杯蓋なども出土した。

縄文時代

縄文時代の遺物は、調査区はもとより、台地全体で確認される。今回の調査区からは、竪穴住居跡２棟・土壙１を検出した。

第８号住居（第５・10－２・３図、図版18）Ｘ41・Ｙ142付近に位置する。やや丸みを帯びた方形の住居で軸は北西方向を向く。規模は、北西・南東方向とも2.8ｍほどであるが、南東辺が、農業用水路により失なわれている。堀込みは、地山から15㎝程度と浅い。柱穴は３カ所を確認したが、本来は、４本柱の住居と考えられる。検出した柱穴には、長さ50㎝幅20㎝前後の凝灰岩質の石がそれぞれ添えられている。根締め石として利用されたものかもしれない。住居中央やや西に70×50㎝の石組み炉を検出した。砂岩質の石材を理用したもので南北に設置されている。この炉の周辺に深鉢８個体・浅鉢４個体・台付き浅鉢１個体分の完形を含む土器が出土した。縄文時代中期後葉のものと考える。

第９号住居（第５・10－４図、図版19－３・４）Ｘ46・Ｙ159付近に位置する。円形のプランの北隅を検出したのみで全体は復元できない。堀屑は、約25㎝堀込まれた竪穴住居である。縄文中期の土器少量を出土したことで確認したにすぎない。

ＳＫ１（第３図）Ｘ４・Ｙ０付近に位置する。調査区北端の土壙である。径90㎝の円形で深さは約90㎝と深い。断面形がややフラスコ状を呈する。底から縄文中期の土器を検出した。また石錘の頭部と思われるものも共伴した。

２．遺　物（図版２～11・21－38）

遺物は、調査区全体で遺物整理箱で134箱分、約484個体相当の土器・石器を出土した。出土遺物の年代は、縄文時代中期後葉の土器・石器３箱分、弥生最終末から古墳時代初頭の土器・石器130箱分、奈良・平安期の土器１箱分で、調査区全体で確認された。遺物は、遺構に伴うものが、非常に多く、それに比べて包含層の遺物はさほど多くない。調査箇所が道路敷きに限られていることもあろうが、本遺跡の１つの特徴といえよう。

弥生時代最終末・古墳時代初頭遺物は、土器・石器378個体分を出土した。遺物のほとんどは、遺構に伴うものである。

４号住居（図版９－４～14、31・32）　遺物は、17個体分を出土した。４は、やや小振りの甕の胴部である。胴部最大径15.75㎝で底部と口縁部が失われている。器面外面を丁寧な箆ケヅリ調整で仕上げた良品である。５は甕または壺の底部である。底部径3.75㎝で胴部が丸く立ち上がる器体が想像される。外面は丁寧なへら箆けづり調整が、内面はなで調整が施されている。６は、胴上部から口縁部を残す中型の甕である。胴上部から口縁部のくびれが浅く、やや外反して立ち上がる口縁である。調整は内外面ともハケなで調整で、口縁は指によるなでを用いている。月影式期初頭の土器に比定される。７・８は、甕の口縁部である。複合口縁で口径は、７が16.5㎝８が14.25㎝である。いずれも口縁のくびれ部から立ち上がる部分は、鋭く弥生時代末の法仏式の様相が強い。９は、壺ないし甕の底部である。内外面にはけなで痕を残す。底部は内湾している。10～13は、高坏である。10は、坏部に棒状の頸部をもつ。口径が34.6㎝とかなり大型のものである。坏部が大きく張り出し口縁がくの字状に外反する。口脩部は、面がつくられる。坏部内外面・脚部外面は丁寧な箆磨き調整が施される良品である。月影Ⅰ式の土器と考える。11・12・13は、底の深い坏部を持つ。脚は無いが、棒状脚が付くものと考える。いずれも内外面とも箆磨き調整が施される。脚部から杯部

が有段である。このうち11は、杯部を残している。口径27㎝と比較的大きく、口唇部が外反しくびれる。法仏式期の末のものと考える。14は、有孔鉢である。内外面にハケなで調整痕が残る、有孔部の形は0.9㎝である。以上だが、出土遺物は法仏式期後半のものと月影式期のものが共伴する。弥生時代最終末の系譜を残しつつ古墳時代の様相を持つ土器と考える。

5号住居（図版10、32、33）遺物は、42個体分を出土した。器種は、壺・甕・高坏・有孔鉢・鉢である。1・2は、ほぼ完形の甕である。2個1対のように並んで住居跡南側で出土した。大きさは、それぞれ口径14.3・13.5㎝、器高19.5・18.5㎝でやや1が大きめである。器形はよく似ている。先すぼまりの内湾する底を持つ底部、底から丸く膨らむ胴部を持つ。口縁はやや外反する複合口縁で指による横なでで調整される。器面内外面の調整は、1がハケなで調整を用いているのに対し2は外面を斜ケズリ調整、内面をなでを用いて調整しているいる。法仏期の後半のものと考える。3・4・7～12・17・19・23は甕の口縁部である。いずれも複合口縁と考えられるが、明確な複合口縁を持つ3・4・8・11・17・19・23とそれが退化した7・9・10・12に大別される。弥生時代の終焉と古墳時代の黎明を示す特徴を有するものと考えた。5は壺の口縁である。内外面にハケなで調整が施される。6・13～15は壺・甕類の底部である。6は外面に篦削りとハケなで調整痕を残し底面がやや内湾する。13～15は底面が平らで内外面はハケなで調整が施されている。16・20・21は高坏・器台である。内外面を篦削りあるいは磨きをかけたもので丁寧な作りである。18・22は鉢である。18は内外面に篦削り調整、22は外面にハケなで調整痕を残す。口縁は、18が有段のもの、22が口縁に明確な段がない。24は有孔鉢で内外面にハケなで調整痕を残す。5号住居も4号住居同様に弥生時代最終末から古墳時代初頭のものと考えるが、やや古墳時代的要素が強いものと考える。

6号住居（図版11－1～16、34、35）遺物は75個体分の上器と石器2点を出土した。土器の器種は、壺・甕・高坏・有孔鉢・鉢である。1はブランデーグラス状の器形の土器である。径3㎝の底部から胴部にかけて開き、口縁部にかけてすぼまるものでソロバン玉状の体部といえる。口縁径9㎝、胴部最大径15㎝で内外面にハケなで調整が施されている。2・5・7・8は壺である。2・7・8はハケなで調整、5は口縁外面及び内面が篦磨き調整が施される。このうち7・8は有段の口縁をもち、7は口縁内側から2つ小さな穴が穿たれる。3・4・9は複合口縁の甕である。3・9は内外面にハケなで調整痕を残す。4は口縁外面に4状の沈線が施される。6は鉢の底部である。出土遺物中、唯一の赤彩のもので破片だが、非常に丁寧に磨かれた良品である。10は壺・甕類の底部である。外面を篦削り、内面をハケなで調整で仕上げる。11～15は器台ないし高杯である。外面は篦磨きまたは篦削り調整を施し内面はハケなで調整を施す。11は中型の杯部口縁で有段のものである。12・13・15はラッパ状に開く脚部で、2個1対の穴が3単位穿たれている。14は棒状脚の高坏脚である。16は有孔鉢である。石器は、2点出土した（図版34－①・②）。①は石杵と考える。高さ12㎝・使用面の径10㎝で、安山岩製である。仕様面は円形で非常にきめ細かい。仕様面に顔料の付着は認められないが、出土遺物中、唯一の赤彩の土器を伴うことから注目される。石臼は出土していない。②は、粘版岩の穂摘み具と考えた。破片で刃部もはがれている。以上だが、6号住居は弥生時代の様相を残す遺物が多くみられる。

7号住居（図版11－17～24、36）遺物は、20個体分の土器と攻玉未製品を出土した。器種は、壺・甕・高坏である。17は、かなり大きめの壺の口縁である。有段口縁で17㎝の口径を持つ。内外面にハケなで調整を施すが、口縁端部外面は指によるなでが加えられる。かなり摩滅・劣化しており表面は一部はげている。18は壺口縁である。外反し端部が丸く収まる内外面にハケなで調整痕を残す。20・21は甕である。20は頸部から胴部にかけて残っており頸部に接合痕を残す。外面にハケなで調整が施される。21は、口縁で口唇部が外反し面を残す。内外面にハケなでを残す。19は、台付きの土器の口縁部と考える。口縁に向かってすぼまる器形で口縁に数条の沈線をのこす口径は約10㎝である。22は、鉢の底部で坩などに近い器形と考える。23・24は高坏・器台である。23は杯部口縁で口径16㎝のやや小振りの器台と考える。内外面にハケなで調整を施す。24は、棒状脚の高坏の脚である。外面は篦磨きを施し丁寧な作りの良品

である。このほか攻玉が行われていたことを物語る未製品・破片が4点出土している（図版36－①）。いずれも細片であるが、勾玉の端部、玉状に加工する途中のものがある。以上であるが、7号住居は、一部削平を受けていることもあり遺物の残存数、状態ともあまりよくない。しかしながら他の住居同様、弥生的な要素の強い土器と古墳的要素のある土器が混在する。

SK1201（図版7、8、29、30、31）SK1201は、住居跡として取り扱ったが、出土した遺物はこの埋土中のものばかりで、後に土器捨て場として利用されたものかもしれない。出土遺物は、137個体分の土器と攻玉未製品である。図版7と図版8の1～6は、壺・甕類である。図版7の1～4・6は壺の口縁部である。1は、直立する頸部が口唇部でやや肥厚し外反する。頸部に篦状具により十字に切られた刻紋を残す。外面は、縦方向のハケなで、内面は、横方向の短いハケなでを連続させることで調整している口径は、14.5cmを計る。2は、有段の口縁を持つ。外面は篦磨き、内面はハケなで調整を行う。口径15cmをはかる。3は、外反する頸部に口縁で有段を持つもので外面をハケなで調整、内面を篦削りで調整する。4は頸部の短いものである。口縁に有段状に縁れを持ち外反する。口縁径14cmである。6は、長頸壺の口縁である。内外面を篦磨きにより整形した良品である。胴部との接合部に突帯を施す。口縁径8.25cm頸部長13.5cmを計る。5～14は甕である。いずれも複合口縁のものだが、大型のものから小型のものまでさまざまなバラエティーがある。5は口縁径12cmのもので口縁に4条の疑凹線が施される。内外面とも篦削りによる調整がなされた良品である。8はかなり大型のものである。口唇部が尖なわれている。口縁部付近の径は約25cmで外面にハケなで痕を残す。胴部との接合部に突帯を巡らし底に篦状具による刺突を行っている。9はほぼ完全復元できた。胴部が大きく張り出し底部がすぼまるもので器高30cm、口径20cm、底部径4.5cm、胴部最大径25cmで内外面全体にハケなでを縦横に施し調整される。11は9と同程度の大きさの胴部から口縁部が残存する。胴部上方に篦状具による刺突を施すが、内外面のハケなでを施す際に削られている。内面胴部に篦状具による条線がみられる。12は胴部上方に篦状具による刺突を施すが11と異なりハケなでの後行われる。内面はケヅリのみである。図版8の1～6は壺甕類の底部である。底面が平らな1・2・6、内湾する3～5がある。1・2は外面をハケなで、内面を篦削り、3～5は内外面をハケなで調整している。7～15は、高坏である。7～11は、杯部で11以外口縁を残している。内外面を篦磨き調整を行う良品である。ゆったりとりと2段に外反するものが多いが、10は陣笠状のもので他と趣を異にする。12～15は脚で13以外はラッパ状に開くもので外面を篦ケヅリ調整した良品である。14は有孔のものである。13は棒状脚で裾部に至る部分が有段となり突帯状に疑凹線を施したものである。4個の孔がみられる。このほか攻玉の未製品がある（図版31－①）。7点出土し、石質は蛇紋岩である。以上だが、土器は法仏期後半から月影期初頃のものでやや時期差がある。

土壙　遺物が出土した土壙は、6カ所である。

SK64（図版2－1～9、21）出土遺物は、甕8・高坏4で個体数は12である。1～5は甕である。1は完形で出土した。底部が丸く胴部は、倒卵形を呈する。複合口縁を持ち、外面をハケなで、内面は篦状工具により削られる。口縁は、指によるナデである。2は複合口縁で内外面をハケなで調整し、胴上部に篦状具による刺突を巡らす。3は外反する口縁を持つ。4・5は、平らな底面を持つ甕の底部である。6・7は、器台である。同一の個体である可能性が高い。6は複合口縁の受け部で口縁に横走する沈線を施す。7は、ラッパ状に開く脚部で、裾に突帯が巡り、3個の孔を穿つ。いずれも外面は篦削り調整される。8はゆったりと2段に開く杯部を持つ段上に3状の疑凹線を巡らす。9は、小型のもので非常に丁寧に磨かれている。いずれも法仏期のものと考える。

SK177（図版3－1～4、22）出土遺物は、壺2・甕2・高坏2を出土したが、このうちの4点を図示した。法仏期と月影期両者の特徴を持つものが含まれる。1・2は壺である。1はほぼ完全に復元できた。口径17cm器高27cm底部径5cmで外反する頸部を持つ。内外面にハケなで調整が施されるが、胴部外面は、磨かれている。2は直立する頸

部を持つ。内外面をハケナデで調整する。3は、口縁端部にやや複合口縁の名残がある「く」の字状口縁を持つ甕である。内外面をハケなで調整し、胴上部に篦状具による刺突を巡らす。4は、緩やかに2段に開く坏部を持つ高坏である。頸部は棒状で脚裾は2段に開く。孔が4個穿たれる。調整は坏部が内外面とも篦磨き、脚部が篦磨きとハケなでが施される。

SK592（図版3－5～7、図版4－1～7、23、24）器種は、壺1・甕6・高坏3・器台1・鉢1である。図版3の5～7図版4の1は甕である。5～7は複合口縁を持つが、5・6はやや退化した傾向がみられる。口径は17cm前後である。内外面をハケなで調整される。5は胴部が張らず間延びした感がある。図版4の1は「く」の字の口縁の大型の壺で口縁に3状の疑凹線を施す。2は底部から丸く膨らみ2段に外反する鉢である。3は、受け口状の口縁を持つ壺である。4は器台・5～7は高坏である。いずれも篦磨き調整がなされる。4は脚部裾が、2段に開く。5はラッパ状に開く6・7は棒状の脚である。以上だが、法仏期・月影期両者の傾向が伺われる。

SK658（図版4－8～14・図版5、24、25、26）器種は壺6・甕8・高坏10・器台1・有孔鉢1で土壌中、最も出土個体数が多い。図版4の8～11は壺口縁である。いずれも頸部から開いて立ち上がる。8を除きすべて複合口縁を持つがいささか退化した感がある。12～14、図版5の1～4は甕である。図版4の12・14、図版5の1・2は複合口縁を持つ。図版4の13は複合口縁の名残のある「く」の字状口縁のものである。図版5の3・4は底面が内湾する壺甕類の底部である。5～16は高坏・器台である。いずれも篦磨きされた良品である。5～8は高坏脚裾部分である。5は脚から裾にかけて有段となり開く。6・7・8は、脚端部が有段状となるもので、おそらく棒状の脚が付くものと考える。いずれも裾に有孔される。14～16は、ラッパ状に開く。16は4個の孔がある。9・10は高坏の坏部で緩やかに2段に開く器体を有する。11は器台で受け部、脚部双方が有段となる。17は、有孔鉢である。内外面がハケなで調整される。

SK914（図版6－2～9、27、28）出土遺物は土器類と植物遺体である。土器の器種は壺1・甕2・高坏5である。植物遺体は、壺に入れられたイネ・アワないしヒエである。この土壌については次章で考察を加えたい。ここでは土器の概要のみ記載する。2は、植物遺体が入れられた壺である。かぶら状の器体を持ついわゆる細長頸壺である。器面全体が丁寧に磨かれた逸品である。残存器高10.5cm、胴部最大径15.5cm、頸部接合面に残る内径1.8cmと口が非常に狭い。3・4は甕で3は「く」の字状口縁、4は複合口縁を持つ。このうち3はほぼ完全復元できた。口径21cm、底部径5.7cm、器高30.5cmで内外面をハケなで調整で仕上げる。4は底部が無いが器高約20cmとやや小型のものである。5～9は高坏である。いずれも篦磨きされた良品である。5・9は緩やかに2段に開く坏部を持つ。6・7・8はラッパ状に開く脚部である。

SK1032（図版6－1、26）出土遺物は複合口縁の甕1点である。口縁がかなり直立気味で複合口縁の雰囲気のみ表現したかの様な形である。口径は、16.5cmである。

奈良・平安期（図版9－1～3、31）遺物は、3号住居で出土した以外まとまったものはない。1は土師器の丸底の甕である。内外面をハケなであるいは削りで調整する。2・3は須恵器の坏蓋と坏身である。いずれも8世紀末から9世紀にかけてのものと考える。

縄文時代（図版37・38）調査区全体に小片が分布するが、まとまって出土するのは8号住居のみである。出土遺物は、土器　深鉢8・浅鉢4・台付き浅鉢1、石器　石皿1・すり石3・磨製石斧1である。図版37の①②は浅鉢で口縁径約22cmのよく似た大きさ器形をもつ。口縁に4単位のうずまき様の隆起線で施紋、間を縄文もしくはアナダラ貝を用い施紋する。③は台付きの浅鉢で口縁に沈線を巡らす。図版37の④、図版38は深鉢である。図版37の④は、器高45cm、口径42cmのもので半裁竹管と縄文で施紋される。波状口縁に半隆起線を横走させ4単位の文様帯を作る。その間にアナダラ貝による円状の紋を附し、縦位の半裁竹管と縄文で施紋する。図版38は、半隆起線を蛇行させその間に

縄文を施したり、隆線上に刻みを施し施紋する。一般にアナダラ貝の使用は縄文中期後葉の串田新式以降といわれるが、今回の出土遺物は、中期中葉の文様構成もみられる。串田新式に先行する時期のものと考えたい。

V　調査成果の整理

今回の調査で確認された遺構は、縄文時代中期の住居跡２棟、土壙１カ所、弥生時代最終末ないし古墳時代初頭の住居跡７棟、土壙95カ所、溝２カ所、穴1,003カ所、奈良・平安時代の住居跡１カ所で、本遺跡が縄文・弥生末・古墳初頭・奈良平安期の複合遺跡といえる。しかしながら、遺構・遺物が圧倒的に多いのは弥生時代最終末ないし古墳時代初頭である。遺跡範囲に対して調査面積が僅かとはいえ、本遺跡がかなり大規模な集落遺跡であることはまず間違いない。また、遺物は遺構内から一括して出土したものが多く。本県におけるこの時期の数少ない調査例となった。この成果を整理し若干の考察を加えたい。

住居跡について　前述のとおり住居跡は７棟検出したが、そのうち平面形が隅丸方形の住居は１・４・５・６・７号住居である。規模は１・４・６号住居が１辺７ｍ、５・７号住居が１辺５ｍと２種類に大別される。出土遺物は、壺甕・高坏・有孔鉢などバラエティーにとむ。特に大型の６号住居からは、ブランデーグラス状の土器、赤彩の鉢、石杵、穂摘み具、など特殊な遺物が多い。４号住居も大型の高坏が出土しており、ほぼ正方形の土壙が検出されるなど特殊な遺物・遺構が目立ち、５・７号住居とそのあり方が異なる。４・５・６・７住居は占地する間隔が約20ｍとほぼ一定で、集落全体に大型住居と一般的な規模の住居に何らかの法則性があるのかもしれない。住居跡と考えたSK1201は、平面形が円形で床面に柱穴が無く掘り周側縁に12カ所の柱穴がみられる。掘肩も深く、地山から約90㎝でこの住居も他のものと異なる。蛇紋岩を石材とする攻玉未製品が７点検出されることから、この種の作業の工房という見方もできる。遺跡全体を調査したわけではなく、断定はできないが、居住を目的としたものと作業場、祭祀や集会場といった目的に応じた住居があったものと考える。

土壙について　弥生時代最終末から古墳時代初頭の土壙は95カ所検出したが、土壙は、長方形１・正方形３・円形91の３種類がある。遺物を含む土壙は６カ所。長方形・方形のものはすべて遺物を含む。土壙からの出土遺物は残存状況が非常に良好で、一括して出土している。出土遺物は、どの土壙においても壺・甕・高坏・器台がセットとなり出土する。正方形の土壙は、一辺1.3ｍ前後、円形の土壙も1.3ｍ前後の径でほぼ同規模である。出土遺物はどれも作りの精緻な良品で、丁寧なハケなであるいは、器面全体を丁寧に磨かれたものがほとんどである。以上からこれらの土壙は、遺物が廃棄されたというより、埋納されたものと考える。その目的が埋葬であったのか、他の祭祀であったのかは判断の材料は無いが、この集落で頻繁に広い意味での祭祀が行われていたことが想定される。出土する遺物は、法仏式期末から月影式期初期のものと考えられるが、これらが同一の土壙から同時に出土している。複合口縁の退化など弥生時代的な土器に古墳時代的な特徴を次第に加えていくような感を与える。本遺跡の時期が問題となろうが、弥生文化と古墳文化が集落段階でどのような違いがあったのか考える必要がある。

土壙の内SK914には細長頸壺に納められた、炭化したイネ・アワ（またはヒエ）が出土している。土壙の内容を含め若干の考察を加えたい。

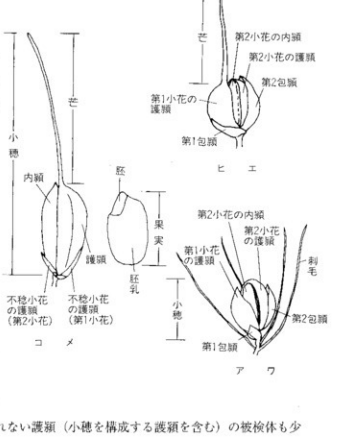
土壙SK914について（図版６－２～９、19－１・２、27）　径約95㎝の円形の土壙で、深さは、40㎝のものである。出土遺物は、長頸壺１・甕２・高坏５で特に長頸壺からは、炭化したイネ・アワ（またはヒエ）が検出された。前述したとおり出土した土器は、丁寧に調整されたものばかりで、特に長頸壺は器面全体が磨かれ非常に精緻な作りのかぶら状の器体を持つ。甕・高坏が長頸壺の下位におかれるが、埋納状況から、一括して埋められたものである。長頸壺はうつ伏せに埋納されていた。以下、納められていたイネ・アワ（またはヒエ）について述べる。　（高慶）

長頸壺のイネ・アワないしヒエについて

壺の内容物は、全量で約114cm³で、有機成分は総て炭化しており、若干の砂粒成分とシルト・粘土を含む。

被検体には、下表に示した、イネ科植物の２種、即ち、イネと、アワ（またはヒエ）が検出された。何れも花序（果序：穂）を構成する部分が確認された。それらは、花序（果序：穂）を構成する部分が部分的小塊をなすか、これが更に細分された破片、あるいは微少な炭片となって検出された。

イネ、アワ（またはヒエ）ともに、果実の内容が失われ中空をなすこと、一部に胚乳部分が発泡したものが認められることなどから、当該試料は酸素の不充分（過少）な雰囲気中で熱を受け、炭化したものと判断される。



***Oryza sativa* L. イネ**

イネでは、いくつかの小穂が炭化合着した小塊（果序の一部と推定される）・小穂（いわゆる種籾の部分）、護頴、内頴、果実（胚と胚乳によって構成される部分；Grain）が認められた。このうち小穂では、小穂が解体した護頴・内頴を含めて、その表面・裏面の構造をよく残している被検体が少なくない。また、護頴には、長い芒をもつものが認められ、その全てが途中で折損し、先端部分は欠失している。芒の認められない護頴（小穂を構成する護頴を含む）の被検体も少なからず認められるが、護頴の形状がよく保存されているものであっても、そのほとんど全てにおいて、護頴頂部に欠失の痕跡が認められ、さらに試料中には、護頴から破損分離した芒の一部と推定される細く長い炭化物が認められることから、被検体本来の形態は、長い芒を持つものであったと推定される。断定はできないものの、例えば、品種ナガノギイネのような形態であった可能性もある。

次に、果実（胚と胚乳からなるいわゆる玄米の部分）においては、その表面部分が炭化皮膜として残るのみで、内容は、確認可能であった何れの被検体においても、失われて中空であった。また、果実には、胚を認めるものと、胚の部分が欠失しているものを認めた。試料中には、護頴／内頴からはずれ、果実単体（玄米の部分）で認められた被検体も存在しているが、試料全体の遺存状態、炭化物塊の破損状況から推定すると、これら果実単体は、試料を容器から取り出す過程で二次的に小穂から分離したものと判断される。

果実の形態については、現在まで計測分析を行っていないが、その形状を見る限り、いわゆる短粒米、*japonica* 型として問題はないと判断される。ただし、観察事例では、その形状に若干の変異が認められる。

佐藤助教授のご教示に依れば、この果実の形態の変異は、単に相似形で大小の違いがあるのではなく、形そのものが違うことから、イネの穂は１穂ではなく、数穂、少なくも２～３穂が容器内に収められた、と判断されるという。

したがって、断定はできないものの、イネにおいては試料全体として、イネの穂数穂がそのまま容器に納められたものと推定される。また、佐藤助教授に依れば、明らかに熱を受けて炭化したものなのでDNAを取り出すことは困難で、種類を同定することは難しいという。

取穂の時期については、判断材料を持たないが、完熟して充分な乾燥が終了する以前の、何れかの時期、である可能性がある。筆者はかつて、蒸し焼きによって炭化米をつくる実験を試みたことがあるが、このとき、完熟して充分

な乾燥を経た試料からもたらされる炭化米は、強く発泡したものを除き、何れも胚乳部分が充実した状態で、果実の表面部分のみを残して中空となる事例は確認されなかった。強く発泡したものについては、中空となるものはあるものの、発泡にともなって強度の変形を受け、今回の当該被検体に認められたような外形をよく残し中空となる例は確認されなかった。事例の試行が不充分であるため、強く示唆するには至らないが、今後検討を進めるべき課題と考えられる。

***Setaria italica*（L）Beauv. アワ、または、*Echinochloa utilis* Ohwi et Yabuno ヒエ**

アワ（またはヒエ）では、果序の一部、小穂が炭化合着した小塊、第二小花（果）が検出され、一部には発泡して形状が変形しているものも認められた。炭化物塊として検出されたものの中には、一部に穂軸、小穂の付く軸と推定される部分を認めるものも存在する。護穎・内穎からなる第二小花（果）の部分は表面の構造もよく残っているが、それ以外ではこれが付着する軸のみが残存し、アワかヒエかの同定を可能とする部分がほとんど失われているため、これを峻別することは断念した。

アワであれば、芒状の刺毛、第一包穎、第二包穎、第一小花の護穎が失われている状態、ヒエであれば、第一包穎、第二包穎、しばしば芒を持つ第一小花の護穎が失われている状態、ということになる。

ただし、果序の一部と判断される炭化物塊には、アワの分果序と類似の構造が認められる部分のあること、アワの刺毛の一部が残存するかと思われる部位のあること、などから、被検体についての更なる精査は試みる価値ありと判断される。これら被検体の各々の部分については、試料が炭化する過程において失われたと判断されるが、容器から取り出される過程において二次的に失われた可能性もあり、今後に検討の余地がある。

小穂、小花（果）については、塊となって検出された第二小花（果）または小穂に、果序（穂）の構造の一部と判断されるものが多く、炭化の時点で二次的に合着したと推定される小塊は多くはない。また、破損の少ない第二小花（果）は、ほとんど単独で検出されないことから、脱粒した第二小花（果）が試料中に存在しなかったとはいえないまでも、試料全体としては、着果して果序をなす状態（穂の状態）が被検体本来の形態であったと推定される。

果実（胚と胚乳の部分）については、これまで試料中に確認されてはいない。検討開始時に既に破損していた第二小花（果）、または検討中に破損した第二小花（果）の内容は、何れも中空で、充実したものは1点も検出されなかった。果実の内容がその表層部分を残して失われて、護穎・内穎の内側に、この表層部分が炭化合着した状態であるか否かは、現時点で確認できてはいない。したがって、アワまたはヒエにおいても、イネと同様に断定する手がかりはないものの、試料全体の遺存量、遺存状況からみて、穂、あるいはその一部がそのまま容器に納められたのではないかと考えられる。たとえばアワでは通常、完熟（登熟）した小花（果）が単独でバラバラになって果序から脱落するが、先に述べたように、今回の検討試料では、穂の状態で容器に収納されたと推定するのが妥当であると判断されるため、一応このように考えておく。

現在までのところ、厳密な計数は行っていないが、現在一般に栽培されているアワやヒエの1穂の収量に比して、今回の試料の総量は少ないように見える。しかし、栽培型アワの花序の形態は、品種によって、また、品種内においても変異が大きく、1穂に着く粒数も大きく変化する点を考慮する必要があると思われる。詳細は今後の研究に待たなければならない。

取穂の時期については、イネ以上に判断材料を持たないが、登熟乾燥が充分に行われた後で、検討現況のような試料の遺存状態になるものか、疑問は残る。筆者はアワやヒエにおいては炭化実験を行っていないし、当時どのような品種（脱粒特性など）が栽培されていたかも不明であるため、これも詳細は、今後の研究に待たなければならない、と判断される。（吉井）

いつ炭化したか　当該試料の遺存状況については、以上述べたとおりであるが、最後に、容器への収納、炭化の時期

の順序、収納状態について推定されることに関して付記しておく。

当該試料を容器から取り出すについては、内容物が存在することが判明した段階で、それを単純に振り出だそうとしたができなかった。このことから、また先に述べた被検体の形状から推定して、内容物は大きな塊、恐らくは果序(穂)の状態を、破損の程度はさておき、保った状態であったと判断される。したがって、試料総体の検討時の状況は、容器から内容物を取り出すときに生じた、即ち、試料は容器から取り出すときに小塊に破断したと判断される。

炭化したものを小塊に細分してこれを容器に収納したのであれば、このような状況は生じないであろう。また、容器の形状（口径1.8cm・器高12cm）を勘案すると、炭化した穂状のものを破壊せずに収納することは不可能と判断される。したがって、被検体は生（乾燥状態がどの程度であったかは不明）の状態（しなやかさを残した状態）で容器に収納され、しかる後に、当該容器内で酸素の不充分（過少）な雰囲気中で熱を受け、炭化したと判断せざるを得ない。長頸壺が頸部を失わない時点で、たとえ生の状態であったとしても土器内にイネ・アワ（またはヒエ）を穂のまま納めようとすればかなり困難な状況が予想される。佐藤助教授に依れば、土器(壺)に明らかな２次焼成痕がないのであれば、土器を焼くとき既に穂が入れられていたのではないか、というご教示であった。

土器製作時、体部と頸部が接合される時点において収納され、焼成されたと仮定すれば、矛盾がないように思われる。しかしながら、出土した時点において頸部が失われていることを考えるとき、イネ・アワ（またはヒエ）を納めるため、頸部を取り除いたとも考えられ、この場合の被熱の状況は直接火を受けない、たとえば蒸し焼き状態で内容物が加熱された可能性も捨てきれない。いずれにせよ、明らかに人為的目的を持って土器に穀物を納めて加熱し、土壌にうつ伏せに納めたことは確かで、祭祀あるいは埋葬の際の副葬品などが考えられ、精神生活の一部が見て取れる。

納められたイネについて言えば、その形状から２ないし３品種の穂が納められていたと考えられることから、弥生時代末から古墳時代にかけて栽培されたイネの品種が複数存在することを示すものと考えられ、興味深い。品種によって栽培する田を決めていた可能性もあり、栽培種としてのイネに対する理解がかなり進んでいたことが推定される。

「たなつもの」と「はたけつもの」の代表として、イネとアワ（またはヒエ）が、何らかの祭祀儀礼によって当該容器に収納されたと考えられる事例と判断される。

最近の発掘事例には膨大なものがあり、その総てを把握することを筆者はなし得ていないが、筆者の知る限り、類似の事例は現在のところ知られていないように思う。佐藤助教授にも類例を照会したが、心当たりがないという。今後こうした事例が増え祭祀の状況が明らかにされればと思う。（高瀬・吉井）

上市町砂山林開遺跡出土の壺内から検出された炭化植物遺体一覧

分　類　群	出　土　部　位
Gramineae　イネ科	
Oryza saliva L. イネ	果序の一部・小穂・護頴／内頴・果実
Setaria italica (L) Beauv. アワまたは *Echinochloa utilis* Ohwi et Yabuno ヒエ	果序の一部・小穂・第二小花(果)

Ⅵ まとめ

前章までに述べた点と問題点を要約し今回の調査のまとめとしたい。

1　上市町砂林開北遺跡は、上市町砂林開地内に所在し、郷川左岸標高40～45mの台地上に立地する。遺跡は縄文時代、弥生時代最終末から古墳時代初頭、奈良・平安時代の複合遺跡で今地全体約３万㎡に分布する。

2　主体となる時代は、弥生時代最終末から古墳時代初頭で、遺構・遺物の大半はこの時期に集中する。

3　弥生時代最終末から古墳時代初頭の遺構は、住居跡７・土壙96・穴1,003である。住居跡は隅丸方形のものが５棟あり３棟が１辺７m前後の大型のもの、２棟が１辺５m前後の小型のものに大別される。このうち大型の６号住居からは、赤彩の土器・石杵・穂摘み具などが出土し他の住居にない特殊性が感じられる。円形の住居SD1201は、堀肩が90cmと深く、柱穴も帆肩側縁に12個と他と趣を異にする。

4　土壙の内、長方形のもの方形のものが４カ所検出されすべてで一括して土器が出土した。特に方形の土壙は、３カ所で大きさが１辺1.3m前後で同じ大きさであり企画性を感じる。

5　出土遺物の多くは遺構に伴うもので、特に土壙から出土する遺物は、壺・甕・高坏・器台がセットになり、土器そのものも精緻な作りが目立つ。

6　土壙の内SK914からは長頸壺の中に、イネとアワないしヒエと考える炭化物が収納されて出土した。炭化の状況から見て生の状態の穂数穂が、容器に入れられ熱を受けて炭化したものとみられ、穀物を伴う祭祀あるいは埋葬があったものとみられ今後、類例の検索を行う必要がある。

7　以上であるが、遺跡全体を通して一般的な集落にない遺構・遺物がみられ近接する古墳時代の本江遺跡とは明らかに居住した人の違いを感じる。本遺跡が周辺地域の中核的集落の１つであったことを示唆する。

引用・参考文献

ア　市毛勲『増補朱の考古学』雄山閣出版、1984年
小田木治太郎「北陸東部における古墳時代開始期の土器様相」『北陸の考古学』Ⅱ（石川考古学研究会会誌第32分）石川考古学研究会、1989年

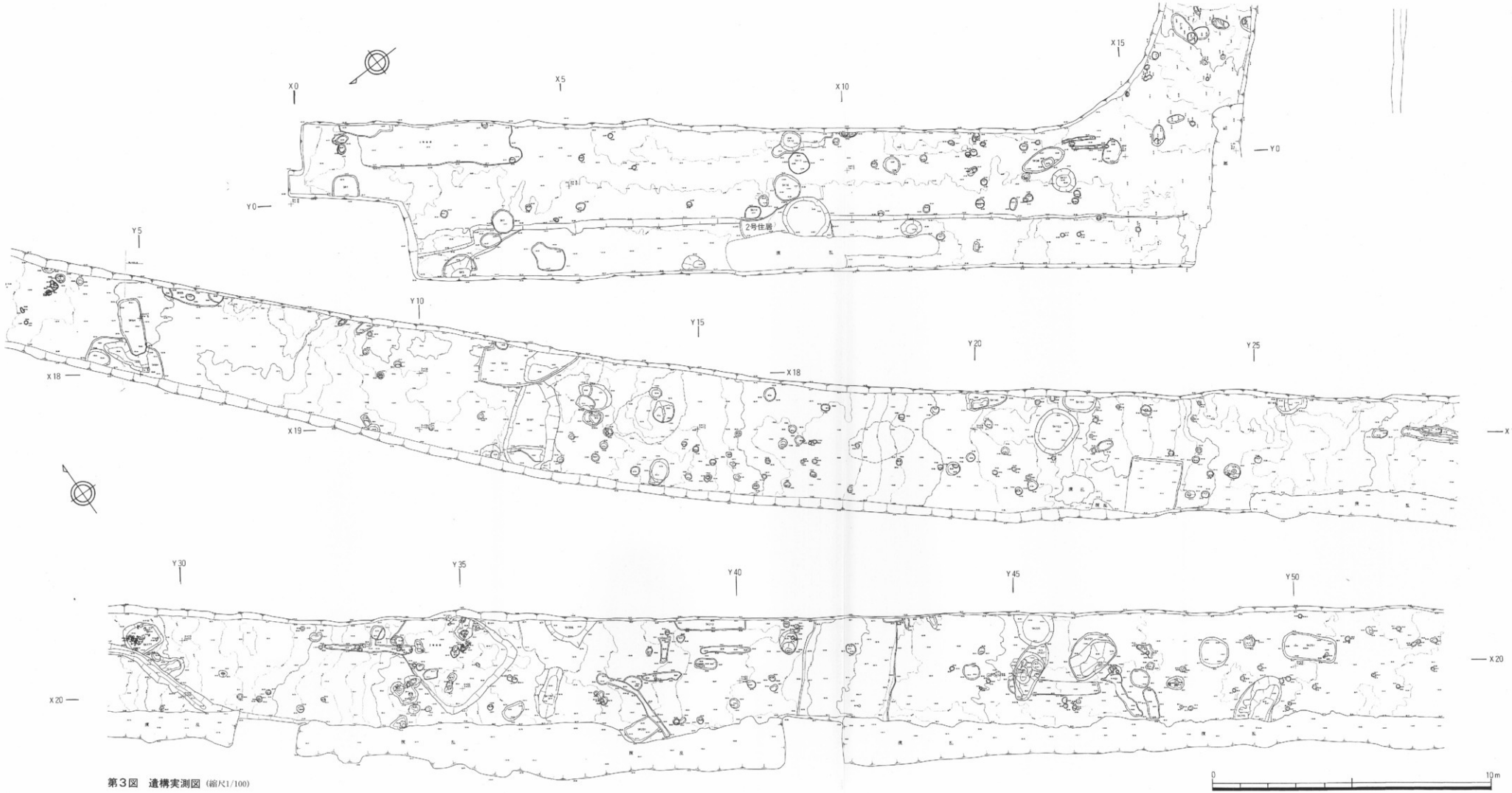
カ　上市町教育委員会1989『上市町埋蔵文化財分布調査報告Ⅰ』
久々忠義「江上A遺跡」『北陸自動車道遺跡調査報告』上市町土器・石器編、上市町教育委員会、1982年
小島俊彰1979「本江遺跡」『滑川市史考古資料編』
高慶孝『富山県上市町湯神子A遺跡発掘調査概報』上市町教育委員会、1992年

サ　杉原荘介・大塚初重『土師式土器集成本編１（前期）』東京堂出版、1972年

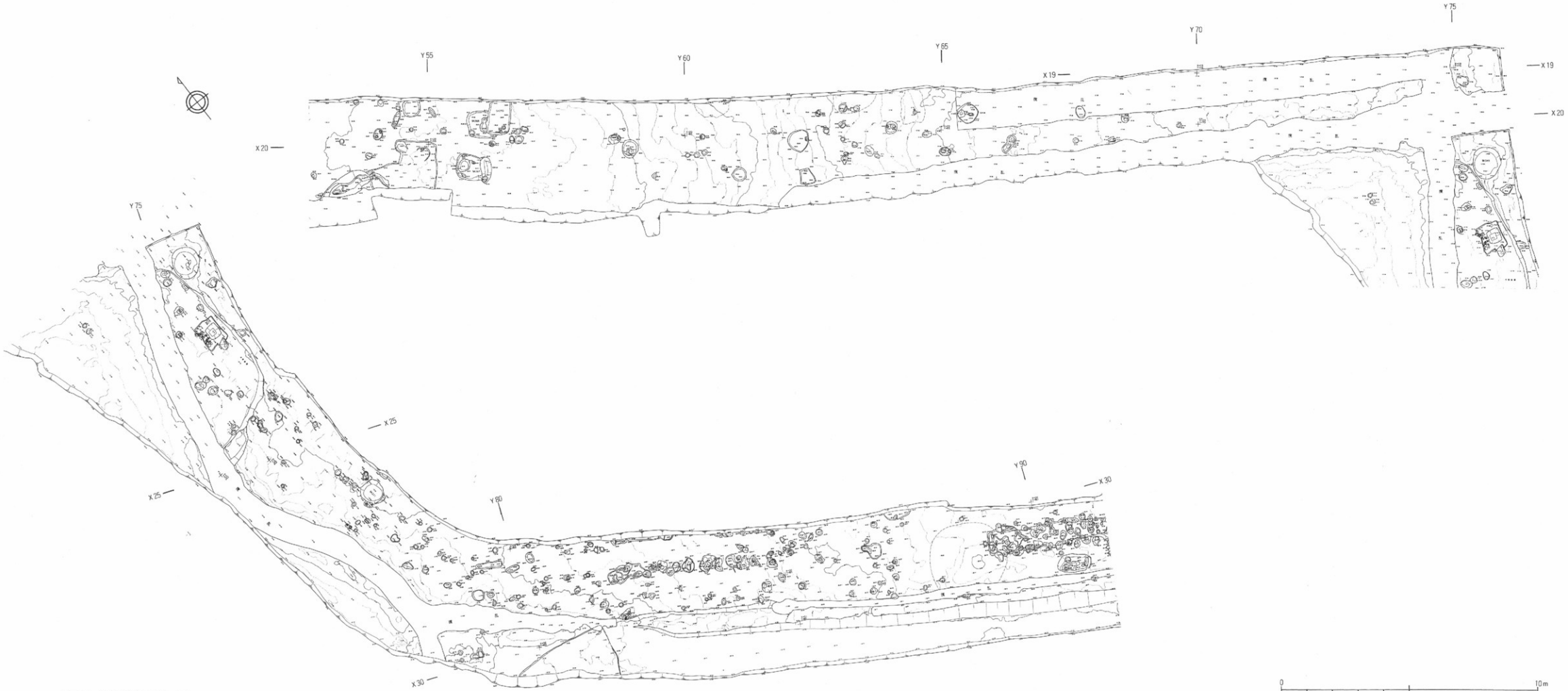
タ　田嶋明人「土師器よりみた古墳時代土器群の変遷」『埴町遺跡』Ⅰ、石川県埋蔵文化財センター、1986年

ハ　橋本正「小杉町圃山遺跡」『富山県埋蔵文化財調査報告』Ⅱ、富山県教育委員会、1972年
藤田富士夫『日本の古代遺跡』13富山、保育社、1983年
本田光子「石杵考」『古代』第90号、早稲田大学考古学会、1990年

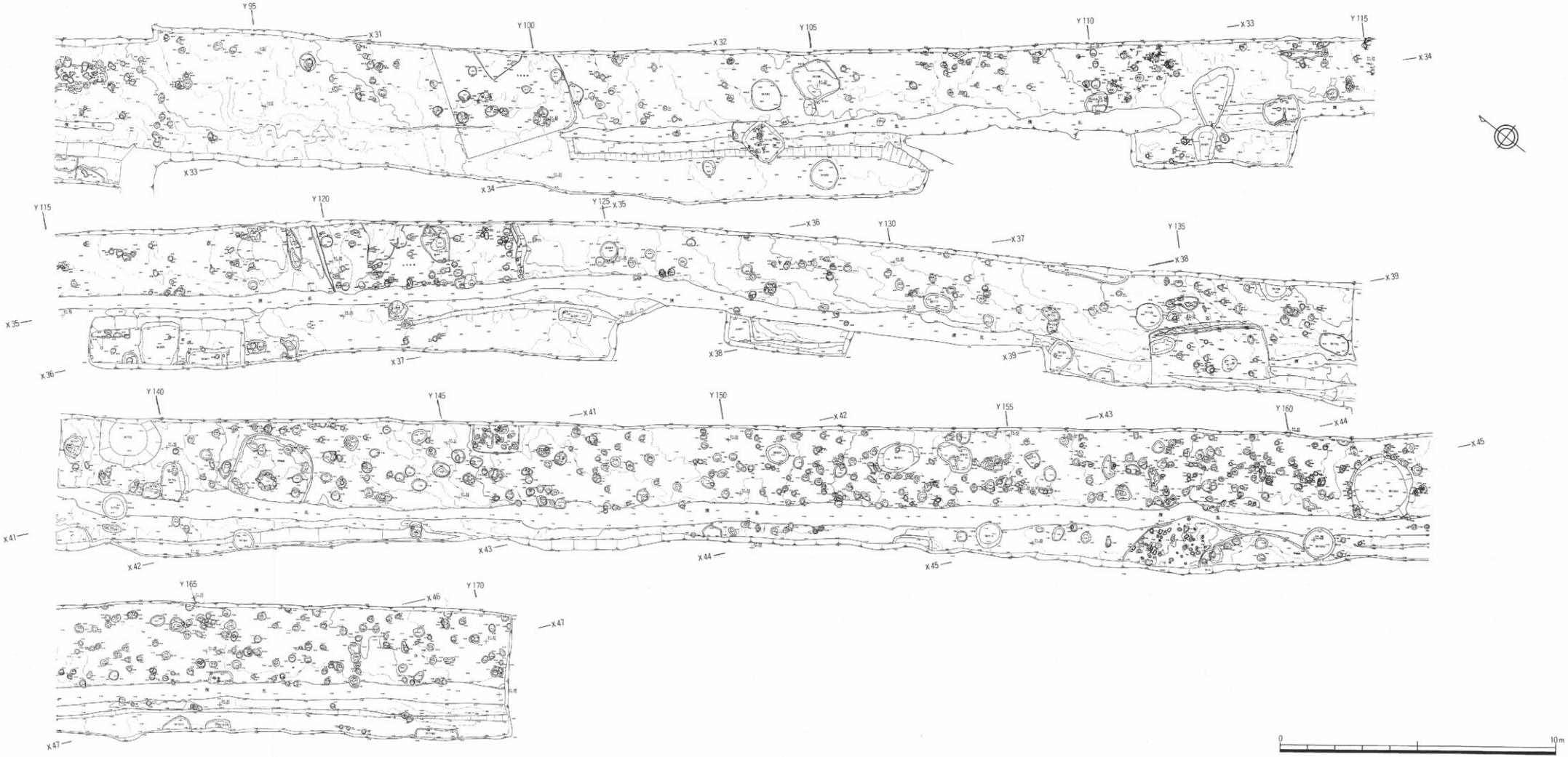
ヤ　谷内尾晋司1983「北加賀における古墳出現期の土器について」『北陸の考古学』石川考古学研究会
八尾町教育委員会1997『翠尾Ⅰ遺跡発掘調査報告書１』
吉岡康暢1967「北陸における土師器の編年」『考古学ジャーナル』
吉岡康暢・田嶋明人　他　「塚崎遺跡」『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』Ⅱ、石川県教育委員会、石川県北陸自動車道埋蔵文化財調査団、1976年



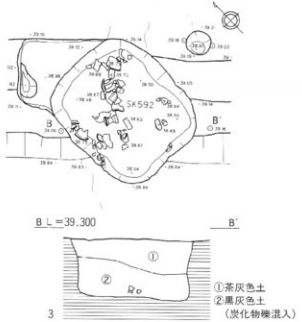
第3図　遺構実測図（縮尺1/100）

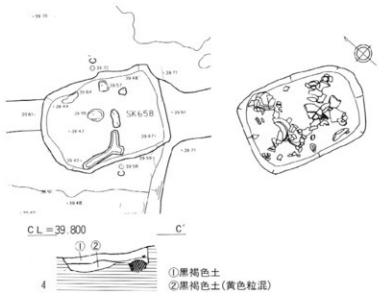


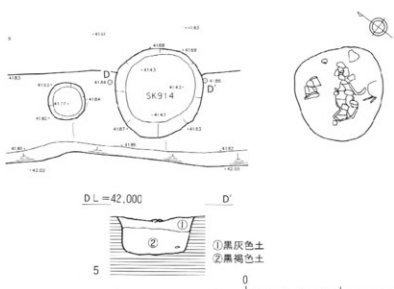
第4図　遺構実測図（縮尺1/100）



第５図　遺構実測図（縮尺1/100）

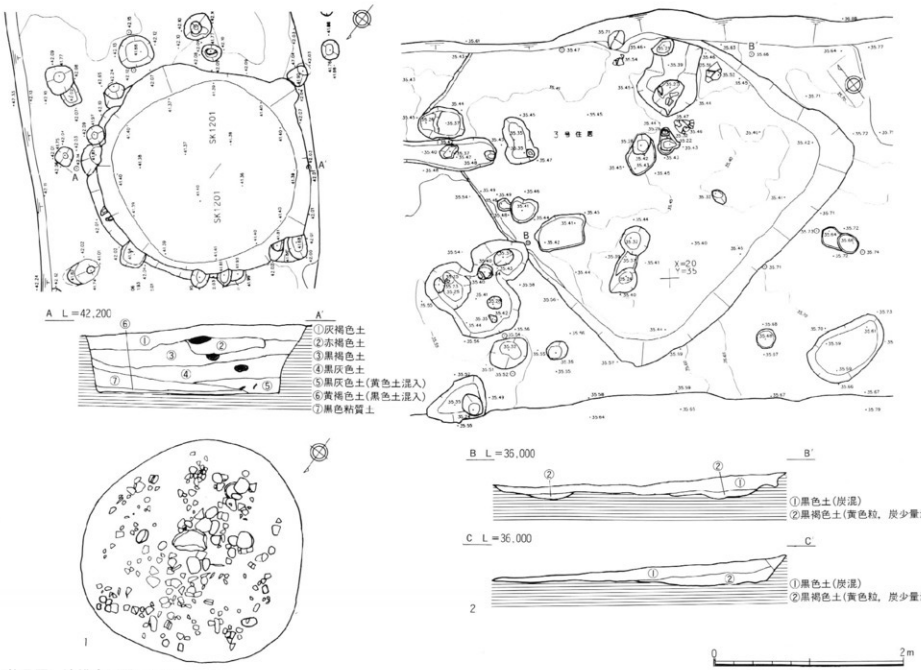






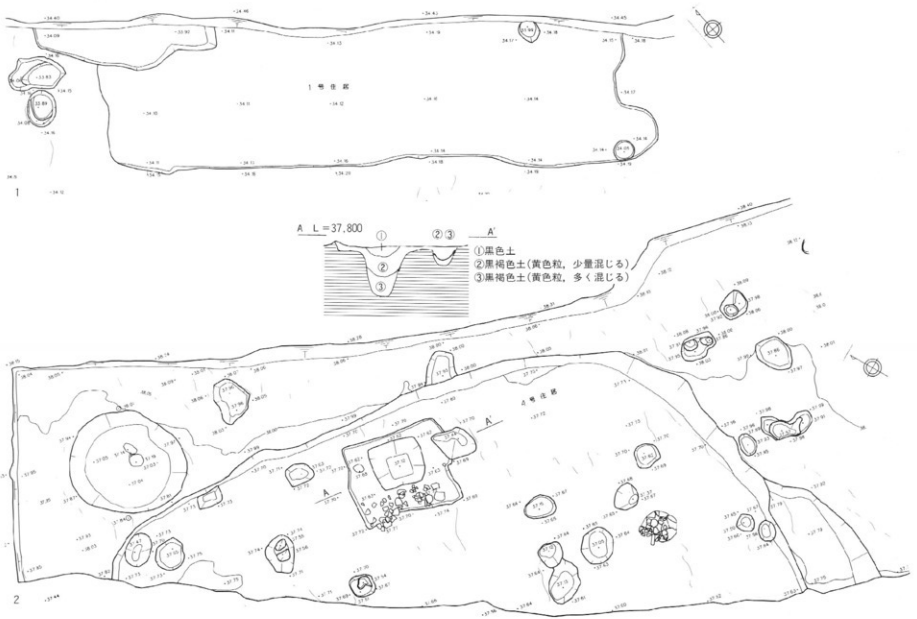
第6図　遺構実測図 (縮尺1/40)

1：SK64，2：SK177，3：SK592，4：SK658，5：SK914

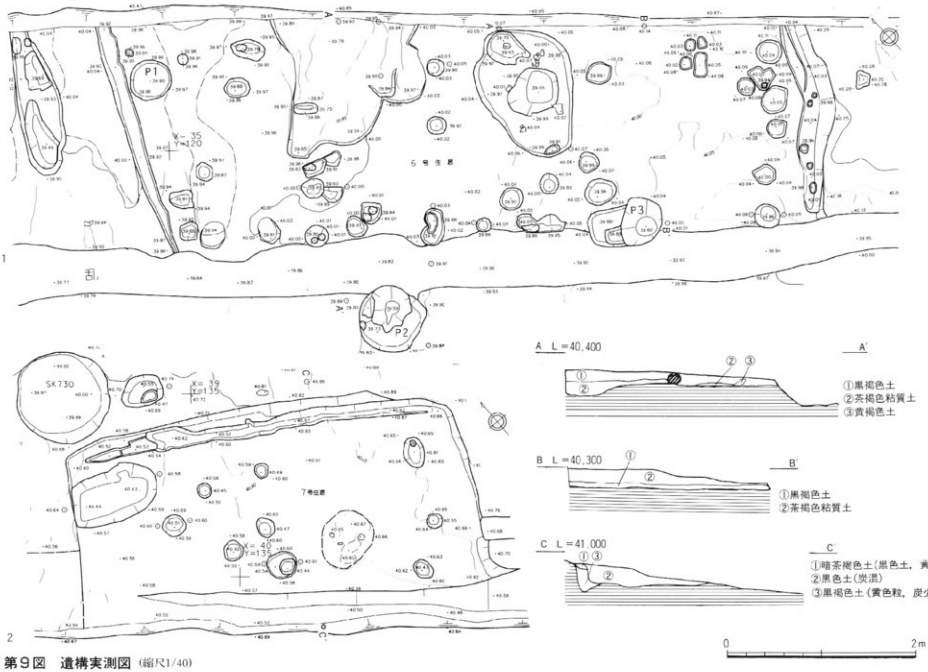


第7図　遺構実測図 (縮尺1/40)

1：SK1201，2：3号住居

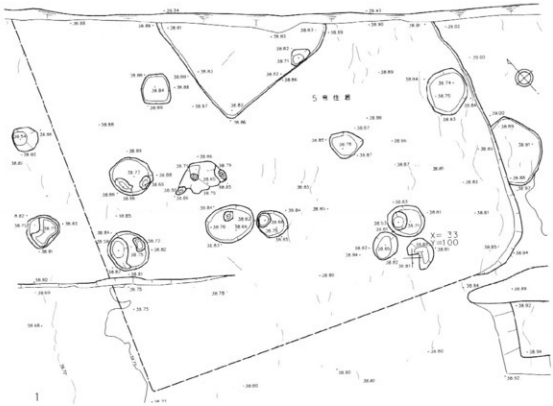


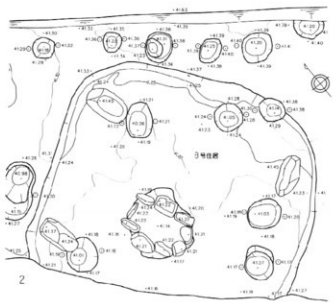
第8図　遺構実測図 (縮尺1/40)
1：1号住居，2：4号住居

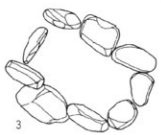


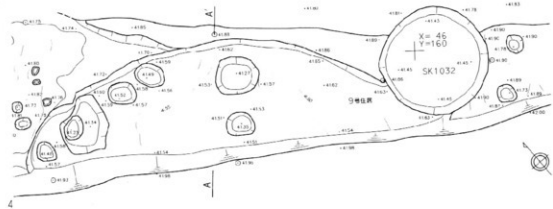
第9図　遺構実測図 (縮尺1/40)

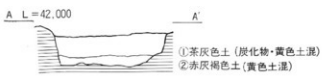
1：6号住居，2：7号住居







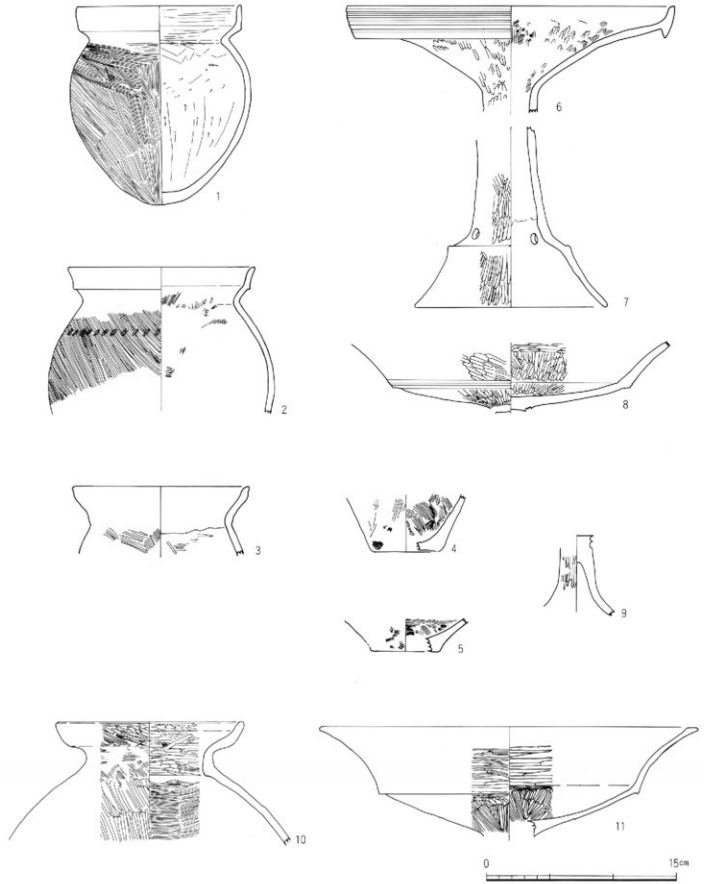




第10図　遺構実測図（縮尺1・2・4：1/40，3：1/20）

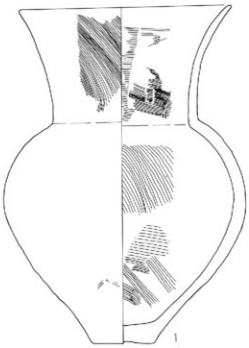
1：5号住居，2：8号住居，3：8号住居・炉，4：9号住居・SK1032

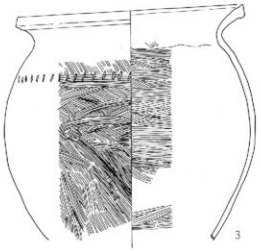
図版 1　砂林開北遺跡周辺航空写真（約1/6,000）

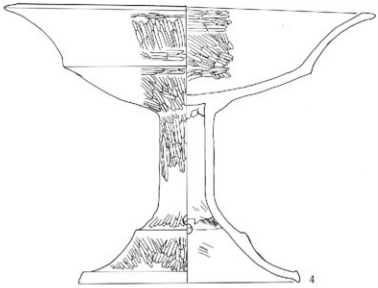


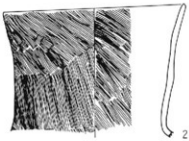
図版2　遺物実測図 (縮尺1/3)

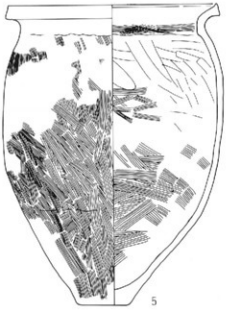
弥生・古墳時代土器　1～7：SK64，10・11：X＝34　Y＝110 付近

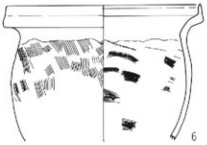


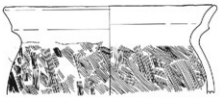






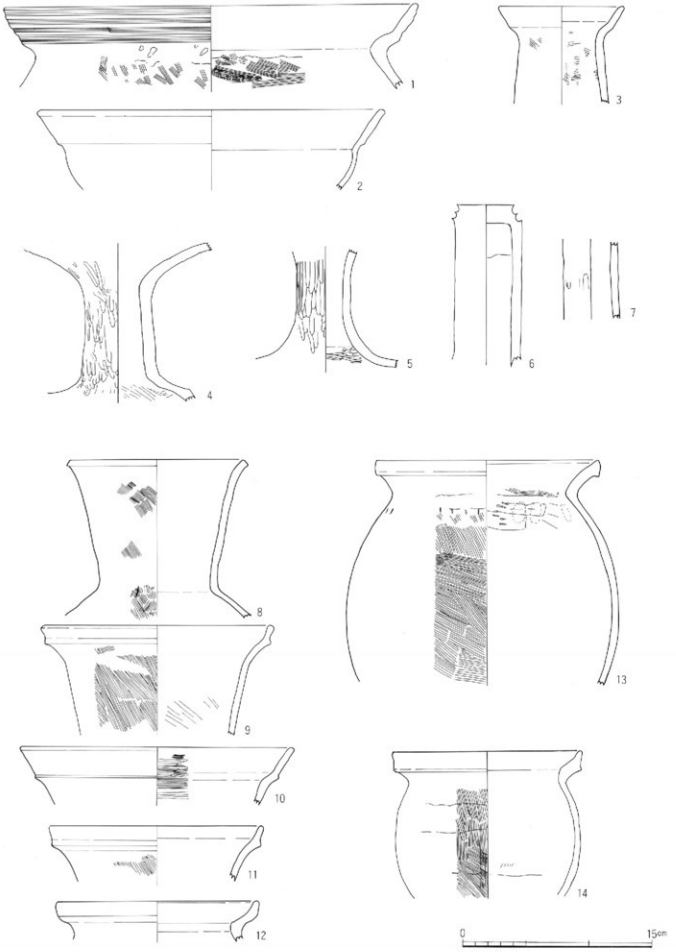






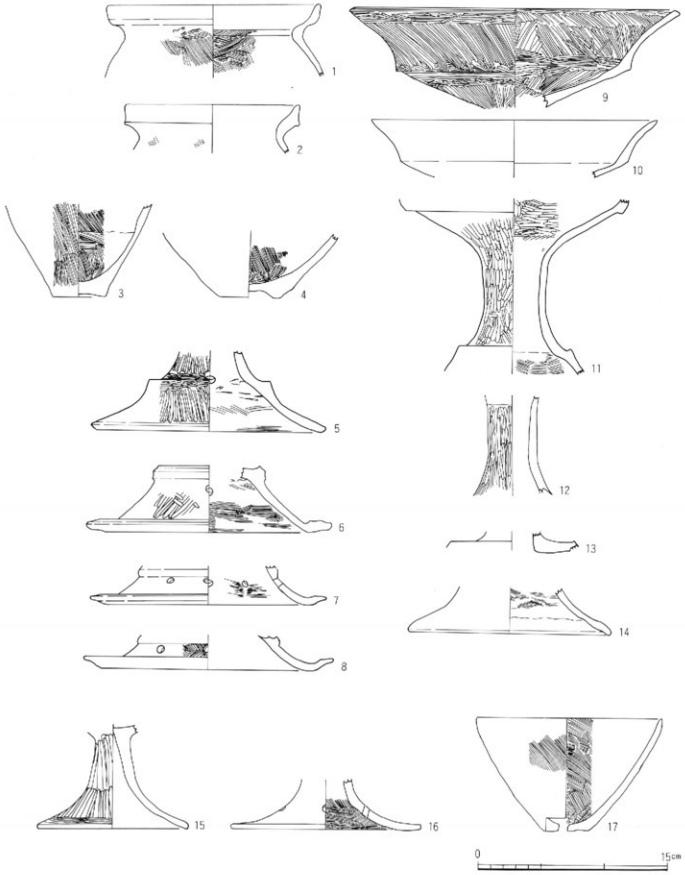
図版3　遺物実測図 (縮尺1/3)

弥生・古墳時代土器　1～4：SK177，5～7：SK592

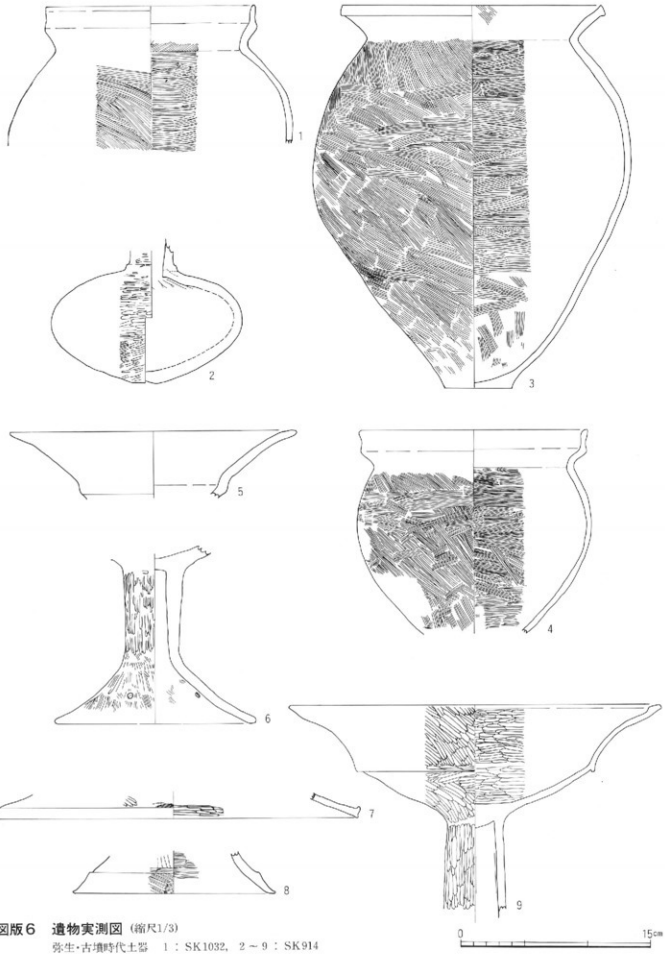


図版4　遺物実測図 (縮尺1/3)

弥生・古墳時代土器　1～7：SK592，8～14：SK658

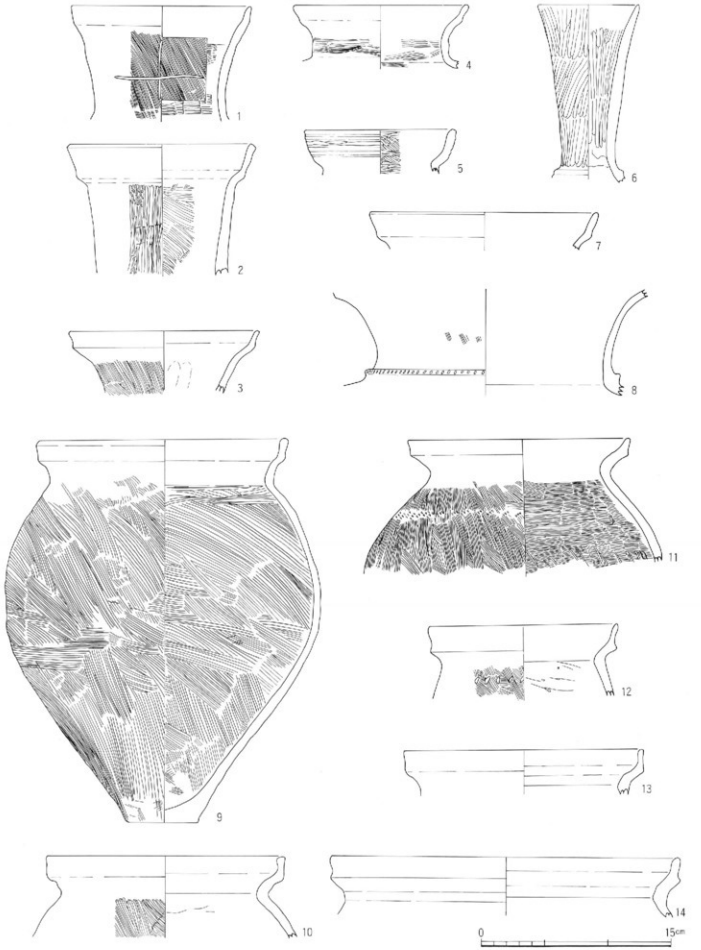


図版5　遺物実測図（縮尺1/3）
弥生・古墳時代土器　1～17：SK658

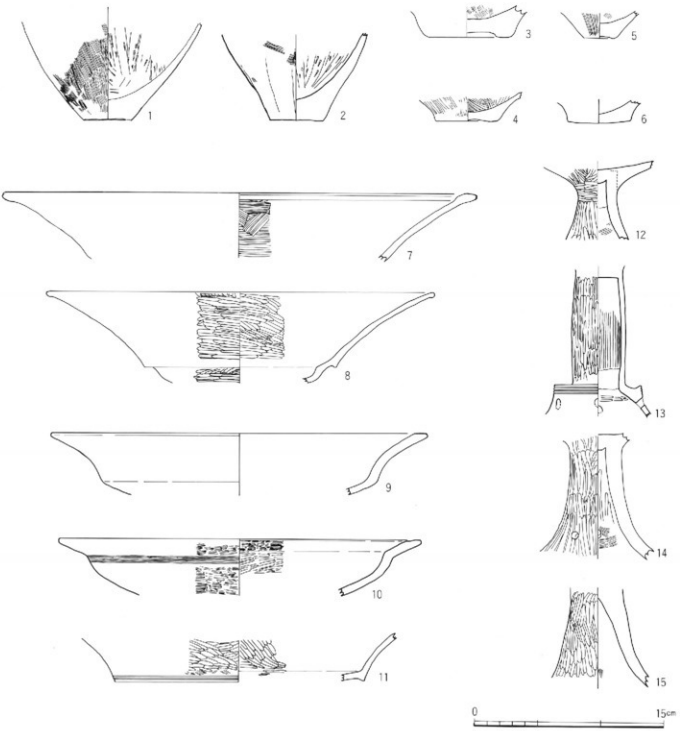


図版6　遺物実測図 (縮尺1/3)

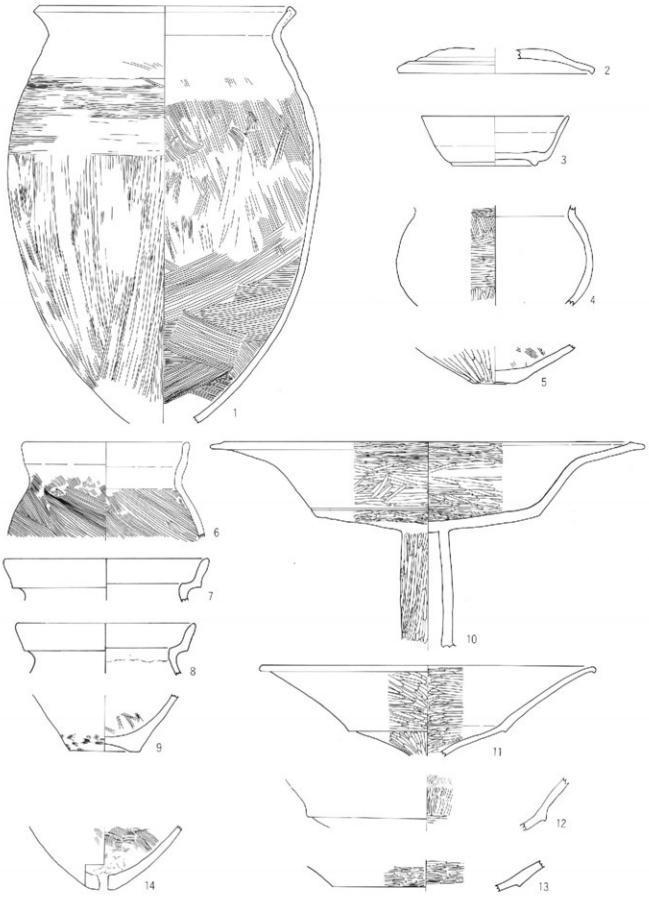
弥生・古墳時代土器　1：SK1032，2～9：SK914



図版7　遺物実測図（縮尺1/3）
弥生・古墳時代上器　1～14：SK1201

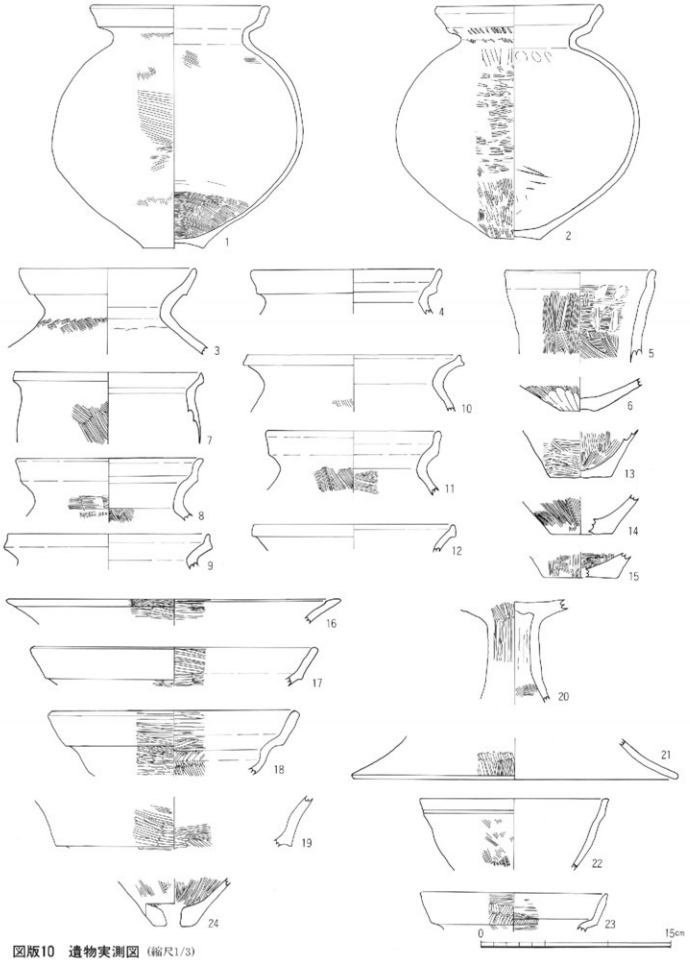


図版8　遺物実測図 (縮尺1/3)
弥生・古墳時代土器　1～15：SK1201



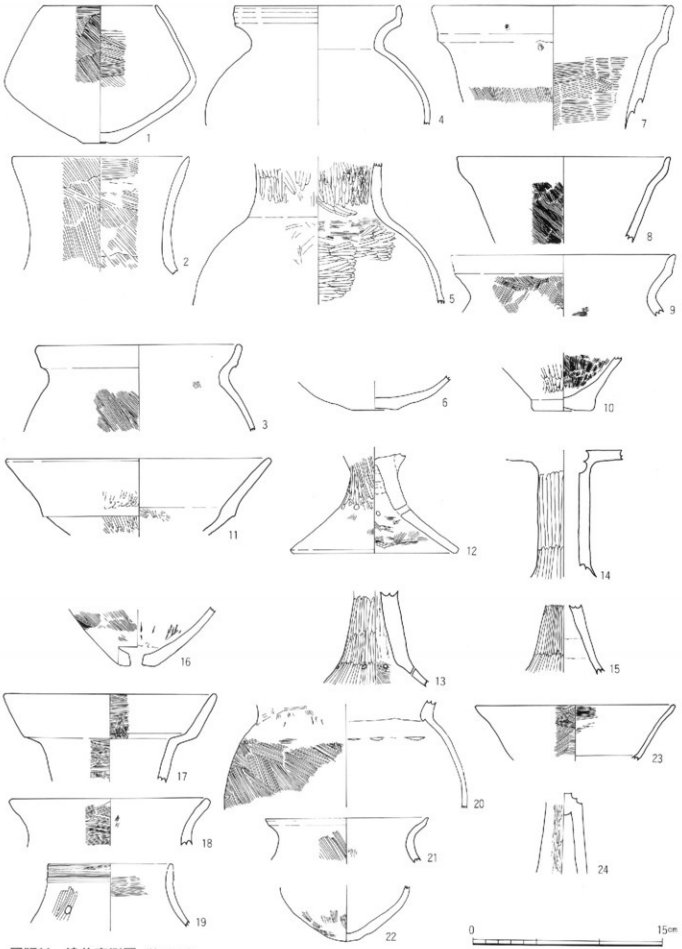
図版9　遺物実測図 (縮尺1/3)

弥生・古墳時代土器　4～14：4号住居，奈良・平安時代土器1・2・3：3号住居



図版10　遺物実測図（縮尺1/3）

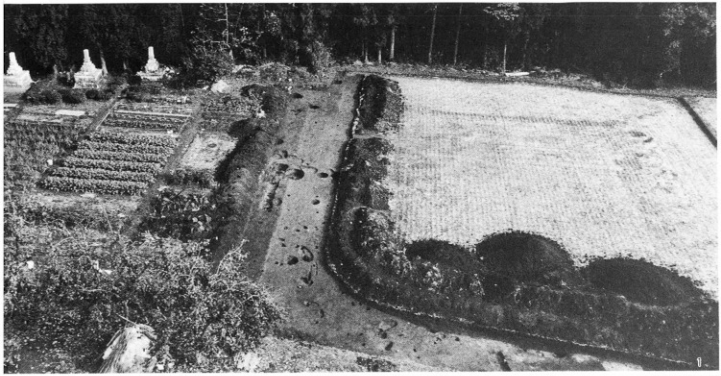
弥生・古墳時代土器　1～24：5号住居



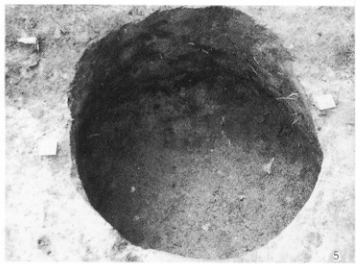
図版11　遺物実測図 (縮尺1/3)

弥生・古墳時代土器　1～16：6号住居，17～24：7号住居

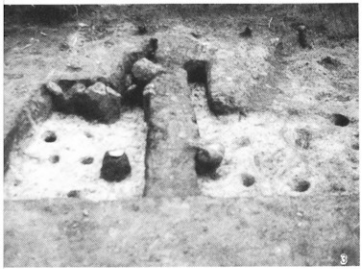
図版12　1.遺跡遠景(南西より・空中写真)，2.遺跡全景(北西より・空中写真)

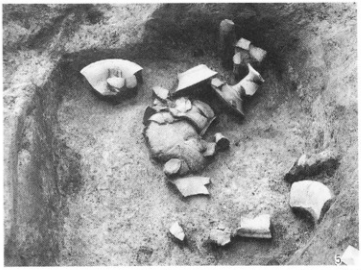


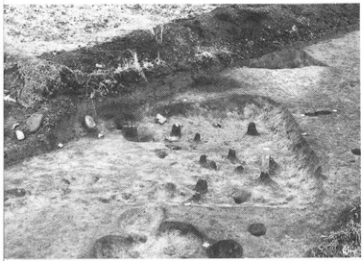
図版13　1.遺跡北側部分(南西より・空中写真)，2.遺跡中央部分(南西より・空中写真)
3.遺跡南側部分(南東より・空中写真)

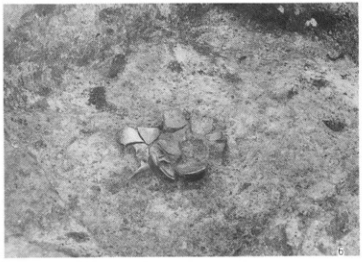


図版14 1.遺跡北側部分(南西より), 2.遺跡北側部分(北東より), 3.SK18(北より)
4.1号住居(北東より), 5.SK7(南東より), 6.2号住居(南東より)

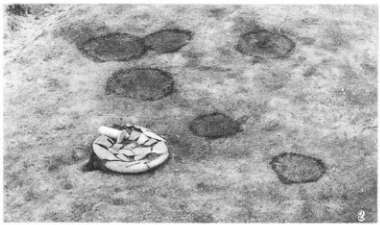


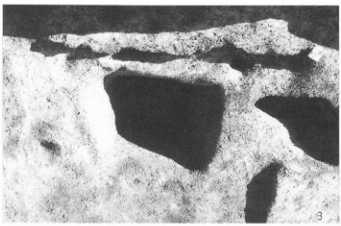


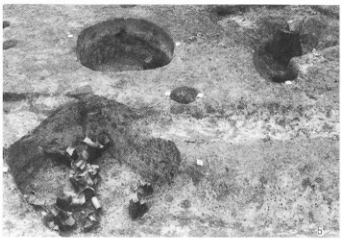


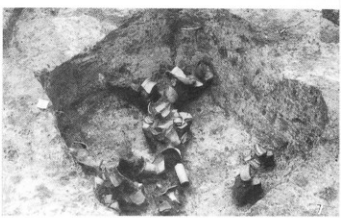


図版15　1. SK64遺物検出状況，2.遺跡北側(YO～Y25)部分，3. SK162(北東より)
4.3号住居(西より)，5. SK177遺物検出状況(南より)，6. SK177遺物検出状況(北西より)

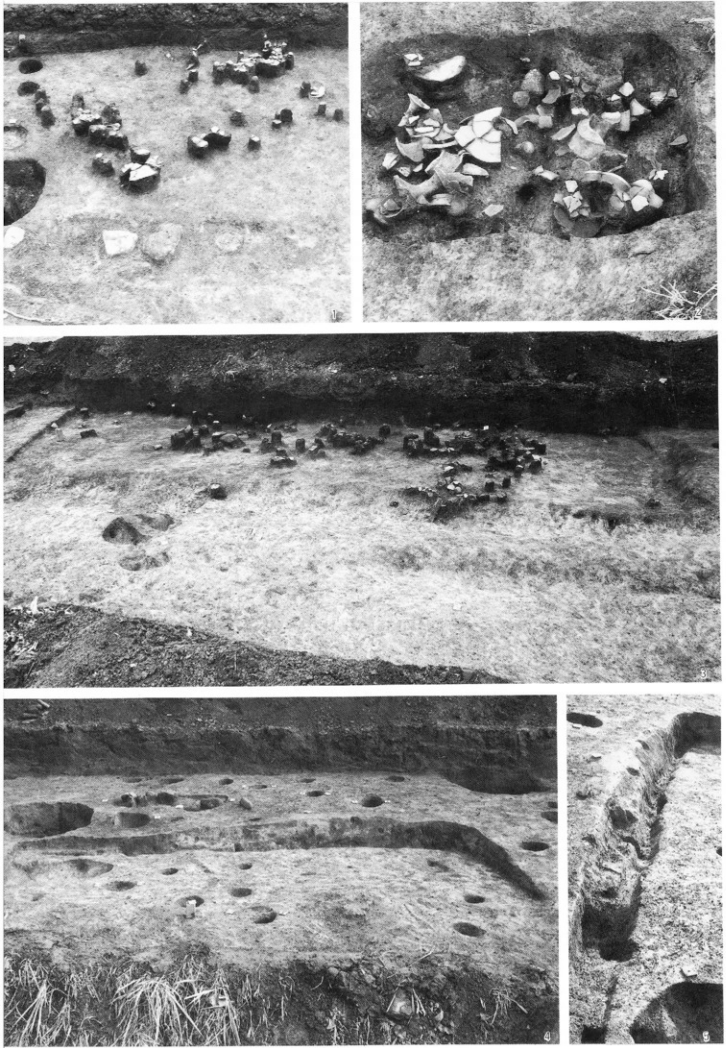




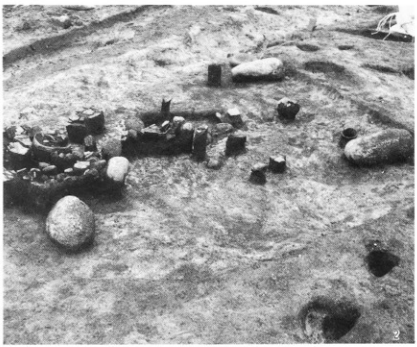




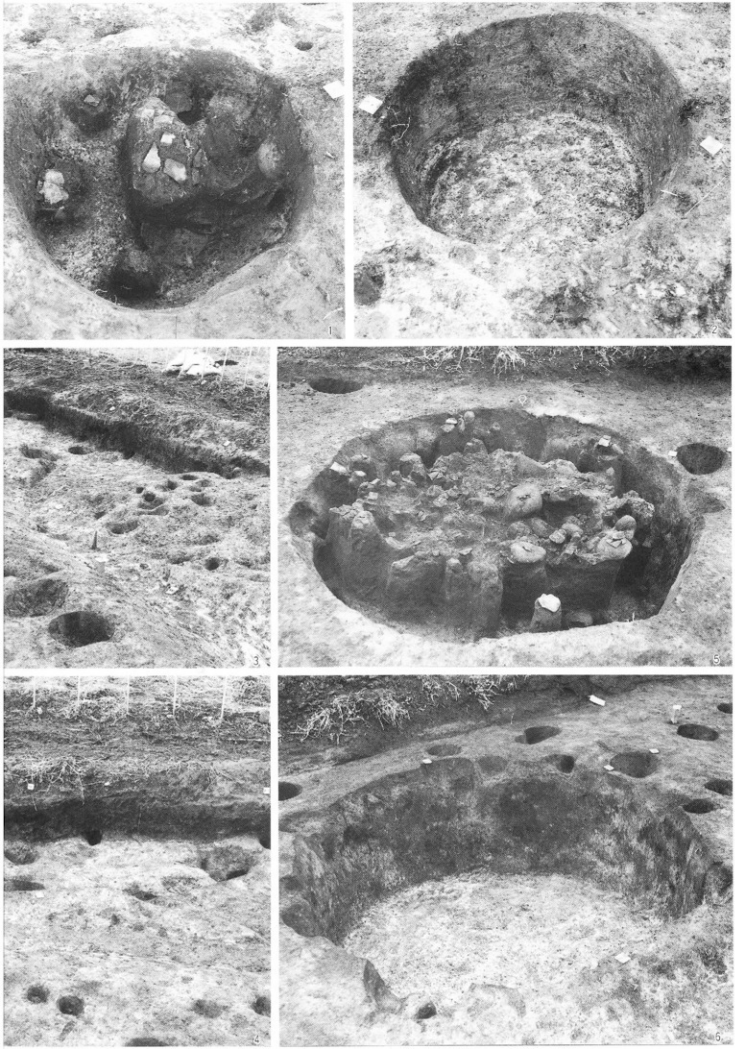
図版16 1.4号住居(西より)，2.4号住居遺物検出状況(南より)，3.4号住居土坑(西より)
4.5号住居遺物検出状況(北西より)，5.5号住居遺物検出状況(西より)
6．SK592遺物検出状況(南西より)，7．SK592遺物検出状況(南西より)



図版17 1. X34・Y110付近遺物集中地点(南西より), 2. SK658遺物検出状況(南西より), 3.6号住居(南西より) 4.7号住居(南西より), 5.7号住居-溝(北西より)



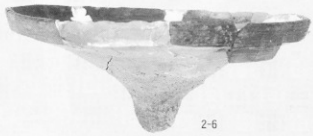
図版18 1.8号住居(南より)，2.8号住居遺物検出状況(東より)，3.8号住居遺物検出状況(西より)
4.8号住居(南西より)，5.8号住居・炉(南西より)



図版19 1. SK914遺物検出状況(南西より), 2. SK914(北東より), 3.9号住居(北より)
4.9号住居(東より), 5. SK1201(南西より), 6. SK1201(東より)

図版20　1.表土剥ぎ風景，2.作業風景，3.作業風景

2-1


2-6

2-8

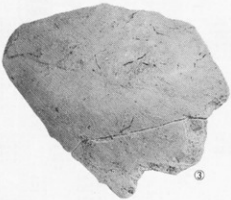
2-7

2-2

①

②

2-3


③

2-4

2-5

2-9

図版21　遺物写真　弥生・古墳時代土器、石器（図版2参照）
（縮尺2－1・2－6・2－7・2－8：1/3，2－2～2－5・2－9・①～③：1/2）

3-1

3-3

3-5

3-4

3-6

4-6

4-5

4-4

①

②

図版22　遺物写真　弥生・古墳時代土器（図版３，４参照）
（縮尺３－１・３－３・３－４・３－６・４－４～４－６：1/4，３－５：1/5，①・②：実大）